

IS 自由な男性操縦者

CLOSER

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

至つて普通の日常を送っていた男性に

突如、襲いかかったトラブルにより死んでしまい

ISの世界に転生して、自由に生きようとする男性の話

目 次

不慮な事故	1
転生後	5
入学初日	9
決闘決定	17
I S 学園初日（午後）	24
決闘までの準備	31
決闘!! 終爾ＶＳセシリリア！	37
決闘!! 終爾ＶＳ一夏！	47
決闘!! 一夏ＶＳセシリリア!!	55
代表決定！	64
終爾ＶＳ亡国企業！1	74
終爾ＶＳ亡国企業！2	82
クラス対抗戦！	97
一夏の特訓開始!!	114
更なる転入生！	124

## 不慮な事故

よくある日常

とある男性は街中の普通の道を歩いていた。  
しかし、男性の目の前に異様な穴が現れた。

穴は空中に開いており、穴の中は異様な空間になっていた。

??? 「何だ？ この穴」

男性は不思議に思い、穴に近づき穴を覗いてみた。  
しかし、その行動が良くなかつた。

男性が穴に顔を近づけた瞬間に穴からライオンの  
腕のようなものが飛び出した。

??? 「うおつ！？あぶねつ！！」

男性は顔にかすり傷を負いながらも

咄嗟に後ろに跳ぶことで間一髪でかわした。

男性が穴を遠目に見ていると

穴からこの世の物ではない生き物が出てきた。

キマイラ 「グルルルル！」

??? 「何だ？ この化け物は？」

キマイラは威嚇しながら男性に近づき始める。

男性は後退りながら、キマイラを見続けた。

??? （コレ、どつからどう見てもこの世の物じゃねえよなあ？頭ライ  
オンだけど、角這えてるし、背中に羽あるし、尻尾もライオンみたい  
に細くないし

てか、俺コレ大丈夫か？）

男性に徐々に近づくキマイラ

男性は逃げようと後ろを向いた瞬間、

キマイラは男性に飛びかかり、男性に食らいついた。

男性はキマイラに飛びかかれ、深い傷を負い

死に際にこう思つた。

??? （ああ、これで終わりか

もう少し自由に生きたかつたな）

男性はそこで力尽きた

そして、男性が力尽きた後、また別のA N Aが穴が開き  
中から1人の男性が現れた。

??? 「ああー!! 遅かつたか!!

急いで追つて来たのになく

まあ1人で済んだのは幸いか

おつ? コレがこの人の魂だな?

よし、ほら帰るぞキマイラ」

その後、キマイラと男は穴の中に消えていった。

俺が目を覚ますとよく分からぬ場所だつた

??? 「どこだ? ここ」

??? 「おつ? 目が覚めたか」

??? 「知らない男性が居た

??? 「誰だ? あんた」

クヌム「俺はクヌム:創造神だ」

??? 「……」

クヌム「おいっ! そのコイツ何言つてんの?  
みたいな目をやめろ!!」

いや、だつてねえ?

??? 「いや、信じろつてほうが無理くね?」

クヌム「まあ、そりやそうか

で? お前は自分の状況分かつてる?」

??? 「ん? 俺の?」

クヌム「平たく言うと、お前は死んだ」

??? 「マジで?」

クヌム「マジで」

そういえば

??? 「あれに食われて?」

クヌム「そそそ、あれに食われて」

??? 「で? あなたに?」

クヌム「俺のペツト」

???「……」

クヌム「説明すると、俺がアイツと遊んでたら時空の穴が開いて、アイツが穴に飛び込んでその先にお前が居て、食われたと」

???「簡単に言うと、お前のせいで

俺は死んだと」

クヌム「ピンポーン」

俺は今、無性に目の前に居る奴を殴りたい

???「殴つていいか？」

クヌム「まあまあ落ち着けって、転生させてやるから」

???「いや、少しは悪びれろよ」

クヌム「まあまあお前の好きな条件で好きな世界に転生させてやるから、それで許してくれよ」

ん？転生？

???「何でも良いのか？」

クヌム「ある程度ならな」

???「例えば？」

クヌム「その世界の人を殺せとかは無理」

なるほど、その世界の歯車を大きく変えるのは無理らしい  
クヌム「お前が変えるぶんにはかまわんがな？」

なるほど、俺が変えるのはいいと、ん？

クヌム「ん？どうした？」

???「俺はしゃべってないが？」

クヌム「思考ぐらい読めるさ、神だからな」

そういえばそうだつたな

???「ならI-Sの世界に転生したい」

クヌム「I-SねOK

好きな条件とか特典はどうする？

I-Sに乗れるのは当たり前として

好きな機体とかあれば、創れるが？」

??? 「色んな機体に乗りたい

俺は飽きっぽいから、色々な機体に乗れるようにしてほしい」

クヌム「なら機体にデータをお前が打ち込んで変形できるようにしよう」

??? 「なら待機形態はハロにしてくれ」

クヌム「よし」

??? 「あと、あがり症を治してほしい」

クヌム「いいだろう」

??? 「あと俺が自由に行動出来るように配慮してほしい。縛られるのは嫌いだ」

クヌム「なるほど」

??? 「そんなどこかな?」

クヌム「よし、転生するにあたって名前が変わるが希望する名前はあるか?」

綺堂 終士「なら綺堂 終尔（きどう しゅうじ）にしてくれ」

クヌム「よし、お前はこれから綺堂 終尔だ

新しい人生楽しんでこい」

そして、俺はISの世界に転生した

## 転生後

転生してから、数年経つた。

俺は金持ちの家に産まれ

両親に愛され育つた

クヌムの配慮で前世の記憶はあつたが

両親には隠し出来るだけ、普通の子供を演じた

両親は I S 関連メーカーの

父が社長

母は会社全体の作業主任をしていた

ある日、会社に終尔が

遊びに来たときに事件は起こった

その日は新しい I S の後付武装のテストの為に  
会社に量産型の I S が届いており

父は息子に見せようとしていた。

父「ほら、コレが I S だぞ」

終尔「へえーカッコいいね

触つてもいい?」

父「ああ、良いとも」

終尔が I S に触れた瞬間に、辺りは光に包まれた  
研究員「なつ!?

父「ん? 何が起きたのだ? なつ!?

終尔「お父さん? 背? 縮んだ?」

終尔は I S を纏っていた

父は驚き、研究員たちも慌てている

終尔は心の中で

まあ使えることは知つてたけどね  
と思つていた

父は男で I S が使えると分かつたら

終尔に何が起こるか、分からなかつたため

会社の全職員に口止めし、外に情報を漏らさなかつた

終尔「ごめんなさい。お父さん」

終尔は申し訳なさそうに父に言つた

父「お前が気にすることはないよ」

と言つて、終尔の頭を撫でた

その日の夜

終尔が自室にて本を読んでいると後ろから  
声がかかつた

??? 「こんばんは」

終尔「誰？」

終尔が声の方向を見ると1人の女性が窓枠に座つていた

篠ノ之 束「私は篠ノ之 束だよ

君が綺堂 終尔くん？」

終尔「うん」

束は窓枠からおり終尔に近寄つた

終尔の目線までしゃがみ、束は終尔の顔を見た

束「君、I S動かしちゃつたんだつてね？」

終尔「うん、でもお父さんが危ないから

誰にも言つちゃ駄目だつて」

束「うん、そうだね

終くんはまだ小さいしね」

束は終尔の頭を撫でた

束「よしつ！なら終くんにコレをあげる」

終尔「何コレ？」

束「お父さんに見せたら分かるよ

あと、この手紙もお父さんに渡しといってくれるかな？」

終尔「うん!!分かった」

束「じゃあね。終くんまた会おうね？」

終尔「うん!!バイバイ」

束は窓から飛び降りた

次の日

終尔は束から貰つたものを、父に見せた  
終尔はながば、それが何か分かつていてたが

父は束からの手紙を読み、何かを決意したようだつた  
手紙には、束からの世界に対する

謝罪と願いが書かれていた

そして、終尔は父に呼ばれた

父「終尔、明日からお前の専用ISの開発に掛かる  
お前も、開発に加われ

お前は優れた頭脳を持つている

それを使って自分の専用機を作つてみろ」

終尔「うん！わかつた！」

終尔は父に返事をした

数年後

終尔は中学3年になり、高校受験が控えていた  
あの後、専用機を終尔は自分で設計し、  
会社にて組み上げ、試運転などの為に  
母親のつてで、国際IS委員会などで  
国家代表候補生の模擬戦や、専用機などの  
運送の護衛などをしながら、実践経験を積み重ね  
どんどん腕を上げていった。  
そして、ニュースが流れた

『初の男性操縦者現る!!?』

織斑一夏がISに触れ装着した

織斑一夏はIS学園に通うことになるという  
ニュースが流れた

コレを見た父は好機と捉えた

父「終尔」

終尔「なに？父さん」

父「お前IS学園に行け」

終尔「は？」

父「IS学園なら、3年間は安全が保証出来るし、

専用機の試運転などもしやすい」

終尔「まあ確かに」

父「なら決まりだな」

そして終尔のIS学園行きが決まった

## 入学初日

(「…これはキツイ!!）

俺は織斑一夏

今、絶賛日本に初めて來た  
パンダの氣分を味わつてゐるところだ  
この I S 学園は本来なら女子高で男子は  
俺ともう1人の男性だけなのだが：

チラツ

終尔「ZZZZ」

もう1人は机に突つ伏して爆睡してゐる！  
そして頭の上で丸いロボットが転がつていた。  
何だ？あのロボット

皆は俺に視線を集中させてゐるのでかなりキツイ  
助けを求めて、窓際の席の幼なじみに目を向けると…  
パイツ

目をそらされた!!

それが久しぶりに会う人間の態度か!?

そうこうしていると、教室の入り口から

パツと見は中学生だが、体の一部が異様に大人びている人が入つて  
きた。

山田 真耶「皆さん、はじめまして

このクラスの副担任になつた山田真耶です。

一年間、よろしくね

……

クラスの全員が何も反応しなかつた。

それもそのはず、皆は俺を見ていて

先生の話をまったく聞いていなかつた。  
先生は困りオロオロしだした。

真耶「そ、それじゃあ自己紹介を始めましょうか

出席番号順で!!

先生は才口才口しながらも何とか言いきつた

「…くん、…斑くん、織斑くん!!」

一夏 「は、はい!!」

真耶  
「お、大きな声だしてごめんね？」

今、出席番号順で自己紹介してて、  
今おどかつかんなんだナゾ?

自己紹介してくれるかな?」

一夏一ははい!!

や三しま三た

一夏「お、識斑一夏ですっ！よろしくお願ひしますっ！」

•  
•  
•  
•  
•

皆の視線がどんどん俺に注がれる

一夏一以上です!!

アラル

教室の大半の人かすこけた

スパン

千冬 「貴様は自己紹介もまだもご出来んのか?」

一夏 「いって!? えつ!? 千冬姉何でここに」 スパン

千冬「ここでは織斑先生と呼べバ力者」

え？ 織斑くん千冬様の弟？

千冬「静かにしろっ！」

私がこのクラスの担任になる織斑千冬だ！

私の役目はひよここの諸君にを

立派になりたければ、私の言

ハイで返事をしろ、よくなくともハイで返事をしろ

わかつたな!!」

……キヤアアアア!!

千冬様よ!!

本物の千冬様よ!!

千冬様に会うために北海道から来ました!!

もつと叱つて!!

時には優しく指導して!!

千冬「静まれっ!!

まったく毎年毎年、何故私のクラスは  
バカが多いんだ? それと綺堂そろそろ起きろ」

終尔「ZZZZ」

千冬「布仏、すまんが綺堂を起こしてくれ」

布仏 本音「はい

しゅううう織斑先生が呼んでるよ」

終尔「ムクツ

終尔は体を起こし、ポケットからチヨコ取りだし  
本音の口に入れた

本音「おいしうありがと」

終尔「ニコツナデナデ ZZZZ

本音の頭を撫でた後もう一度寝た

千冬「綺堂すまんが起きろ」

終尔「え、眠いんですけど?」

千冬「事情は聞いているが、起きろ

自己紹介中だから自己紹介しろ」

終尔「うえーい、やれやれ」

終尔は嫌そうに立ち上がった

終尔「はじめまして

綺堂 終尔です。趣味特技は機械いじり

人見知りはしない方だから

気軽に話しかけてくれ

一年間よろしく!!」

キヤアアアアア

本日二度目の絶叫が起きた

カツコいい!!

爽やか!!

優しく囁いてほしい!!

抱いてっ!!

何か起きて、自己紹介したらめつちや呼ばれた  
マジうるせえ寝よ

終尔はもう一度寝ようとした

スパン

千冬「寝るな」

が、止められた

終尔「…はい」

マジいてえ

くそ、眠いのに

千冬「では、時間もおしているので  
これより授業に入る。残りの自己紹介は

各自でしておけ！」

授業は滞りなく進み最初の休み時間となつた

一夏「ちよつといいか？」

終尔「ん？」

知らんやつが話しかけてきた

一夏「俺、織斑 一夏

一夏つて呼んでくれ

同じ男子同士、仲良くやろうぜ？」

終尔「綺堂 終尔だ

俺も終尔でかまわないと

よろしく！」

ヨロシクネッ！ヨロシクネッ！

一夏「なつ!?何だ!?」

終尔「こら、ハロ脅かしちゃ駄目だろ?」

ハロ 「ゴメンツ！ ゴメンツ！」

一夏 「何だ？ そいつ？」

終尔 「コレ？ ハロ

まあ俺のサポートロボかな？」

一夏 「へえーいいなそれ

俺も欲しいな」

終尔 「悪いがコレは一機しか無いんだ」

一夏 「そつか」

終尔 「そろそろ席に戻ったほうがいいぞ？」

一夏 「そうだな

じゃあまた後で」

一夏が席に戻ると、真耶が入ってきた

真耶 「はいっ！ 席についてくださいーい！」

真耶の授業はとても分かりやすかつたが  
知つてることが大半なので眠くなつてきた。

だが一夏が面白い顔をしてる

一夏 （…………全つ然つ分からん!!）

真耶 「はいっ！ ここまでで分からない人はいますか？」

……

居るわけないだろう

大半参考書に書いてたことしか言つてないし

真耶 「織斑くん？ 難しい顔してますけど、

分からぬところありますか？」

何でも聞いてくださいね？」

先生ですからっ!!」

真耶は胸を張つていつた

おお！ 眼福眼福

バンッ！ 織斑が立ち上がった

一夏 「先生っ!! ほとんど全部分かりませんっ!!  
ズデデツ

教室の大半の生徒がずつこけた

真耶 「ええっ!? こ、困りましたね!!  
他に分からぬ人はいますか?」

……

居るわけないだろう

一夏 「ええっ!? 終尔わかるのかつ!?

終尔 「参考書に書いてたことしかまだ言つてないしな」

千冬 「織斑

入学前に届いた参考書はどうした?

一夏 「参考? ああ、あの分厚いの!

古い電話帳と間違えて捨てましたつ!!」 スパン

千冬 「必読と書いてあつただろうがつ!!

再発行してやるから、1週間で覚えろいいな?」

一夏 「いや、あの厚さは1週間じゃ無」 千冬 「やれと言つている」

夏 「…はい」

アホだなアイツ

おかげで眠気は覚めたが

その後、授業は滞りなく? 終わった

一夏 「」 プシュー

一夏は頭から蒸気を出して突つ伏していた

終尔 「大丈夫か? 一夏」

一夏 「全つ然つ大丈夫じやない!!

何で皆分かるんだ!?

終尔 「参考書を読んだからだ」

一夏 「…ごもつともで」

終尔 「やれやれ・ホレ」 ヒヨイツ

一夏 「何だコレ?」

終尔 「参考書」

一夏 「良いのか?」

終尔 「俺はもう用無いからな」

一夏 「サンキュー!! マジで助かる

ついでに勉強見てくれると助かるんだが?」

終尔「断る

俺もそんなに暇じやない」

篠ノ之 簪「ちょっとといいか?」

終尔「ん?」

一夏「えつ?」

簪「すまないが、一夏を少し借りていいか?」

終尔「いいよ。用は済んだから」

簪「すまん。では行くぞ一夏」

一夏「お、おう

悪い終尔、ちょっと行つてくる」

終尔「いてら~」

一夏と知らん女子は出ていった。

俺も行くかな

そう思い俺は本音に声をかけた。

終尔「本音

アイツのどこ行くけど行くか?」

本音「おお~しゅう~行く行く~」

終尔「じゃあ行くか

俺と本音は四組に向かつて歩きだした

四組に着いて俺は目的の人物を探してすぐに見つけた。

そして声をかけた

終尔「おーい簪」

更識 簪「あつ終尔に本音」

本音「やつほ~かんちゃん」

簪「本音、その呼び方やめてつて!」

終尔「久しぶりだな、簪

一月ぶりぐらいだけど

簪「うん、久しぶり

あれから元気だつた?」

終尔「まあな、忙しかつたが元気だつたな」

簪「そつか、なら良かつた」

終尔「そろそろ戻るか  
じやあ簪、またお昼に」

簪「うん！後でね！」

本音「またね！」

俺たちは先生が来る前に席に着いたが  
一夏と知らん女子は遅刻したようで  
出席簿の餌食となつた

## 決闘決定

3時間目も終わり、一夏、篝（教えて貰つた）と話していると、また知らんやつが話しかけてきた。

??? 「ちよつとよろしくて？」

一夏「ん？」

終尔「あ？」

誰だ？コイツ？

??? 「まあつ!? 何ですのつ!?

そのお返事はつ!?

この私に話しかけられるのは光榮なことなのでですから、それ相応の態度をとるのが当然ですわよつ!?

一夏「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

終尔「誰お前？知らん奴に対する態度を改めるのはそつちだろ？」

セシリア・オルコット「知らないつ!?

入学首席かつイギリス代表候補生であり、試験で唯一試験官を倒した!!

このセシリア・オルコットを知らないと言うんですのつ!?

だから、どうした？

んなもん自慢になるか

一夏「あ、1つ質問いいか？」

セシリア「ふんつ！下々の要求に答えるのも貴族の義務ですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生って何だ？」

ズデデツ

アイツまた変なこと言つてる

一夏「あれつ？俺変なこと言つたか？  
終あれつ!？」

一夏が振り向くと終尔は居なかつた。  
かわりに、紙が1枚置いてあつた

「めんどうなんで、あとヨロシク 終尔」

薄情者ーー!!

一夏は心の中で叫んだ

その頃、終尔は別の場所で

終尔「へえー清香か良い名前じやん  
これから清香つて呼んで良い?

俺も終尔で呼んで良いからさ」

相川 清香「うんっ!! これからよろしくね!」

谷本 癒子「綺堂くん、私も癒子つて呼んで良いから  
終尔くんつて呼んでいい?」

夜竹 サゆか「あつ! 私も私も!」

クラスメイトと交流を深めていた。

セシリア「聞いていますのつ!?」

一夏「ああつ! はいつ! 聞いてます!」

セシリア「まつたくこれだから男は」

キーンコーンカーンコーン

セシリア「また来ますわつ!? よくつて!?

千冬「さて、授業を始める前に

このクラスのクラス代表を決めていなかつたから  
決めようと思う。クラス代表には

クラス代表戦や生徒会の会議

クラスでの雑務などをしてもらう。

一度決まると一年間変更できないから、  
そのつもりでいる。自薦他薦は問わない  
誰か居ないか?」

「はいっ! 織斑くんを推薦しますっ!!」

「私も織斑くんで!」

「私は綺堂くんを推薦しますっ!!」

「私も綺堂くんで!」

「私は織斑くんっ!」

「私は…」

男子の二人の名前をクラスの大半が挙げていく

千冬「綺堂と織斑か

他には居ないか？」

一夏「ちよつ！待つた！俺はそんなのやらな」

千冬「他薦されたものに拒否権は無い諦めろ。

他に居ないか？居ないならこの二人から決めるが」

バンツ!!

セシリア「納得いきませんわっ!!!

クラス代表が男など恥ですわっ!!

この私にそんな屈辱を

一年間味わえと言うんですのつ!?」

セシリアの演説は続いた

セシリア「実力から言えば、この代表候補生で  
ある私がクラス代表になるのは、必然。

それを物珍しいからという理由で

こんな極東の猿がクラス代表

など良い笑い者ですわっ!!!

私はサークスをするために、こんな極東の島国に来たわけではあり  
ませんわ!!

だいたいこんな文化にも後進的な国に暮らすのも  
耐え難い苦痛ですのに」

一夏「イギリスだつて、大したお国自慢無いだろ  
飯マズ大国で何年一位だよ」

セシリア「なつ!? あなた私の祖国を  
侮辱するんですの!?」

一夏「先に言い始めたのはそつちだろ!?」

二人の言い争いは続き

セシリア「決闘ですわっ!!」

一夏「ああ良いぜ!!ごちやごちや言うより  
分かりやすいしな!!」

セシリア「負けたら、私の下僕いえ奴隸にしますわよ



終尔「まずお前は代表候補生に相応しくない。何故なら、代表候補生ならそれらしく

どこに行つても恥ずかしくない振る舞いをするからだ。お前がさつき言つたことは

男女差別をし日本という国を侮辱し

そこに住む人々を侮辱した。

こんな行為を人前で堂々とやるような奴を代表候補生などとは言わん。

お前の言葉は国の言葉としてもとれるからなつまり、イギリスでは日本のことをそんな風に見下してるともとれる。」

セシリア「なつ!?ぐつ!!」

終尔の言葉にセシリアは言い返すことが出来ずにいた  
終尔「さらにも言うなら

ISが誕生し、ブリュンヒルデの栄光を持つ  
織斑先生の故郷であり、ファッショング最前端を行く。この国のどこが後進的だつて？」

セシリア「つ!!」

終尔に言われ体を震わせ黙つていた

セシリア「よくも……よくも

私に恥をかかせてくれましたわねつ!!  
あなたにも決闘を申し込みますつ!!」

終尔「断る」

セシリア「ふんつ!逃げるんですの?」

終尔「……吠えるな三下」

終尔の雰囲気が変わつた

終尔「黙つて聞いてりや

べらべらと、よく回る舌だな?」

終尔の雰囲気は先ほどと変わつて

抜き身の刀のように鋭く

周りの触れたものを切り裂くような

雰囲気が漂つており

近くにいる生徒は涙目の者もいた。

セシリアはその終尔の雰囲気に当てられ足を震わせていた。

終尔「たかが代表候補生」ときで

よくもそこまでデカイ態度が出来るもんだ  
お前ごときの実力者なんぞ、世界に腐るほど  
居るんだよ。専用機を貰い代表候補になつて  
はしゃぐのは構わんが、俺にめんどうかけるようなら  
お前……潰すぞ？」

この時、終尔はこの日一番の殺氣を出した。

セシリア「ひいつ!!」

終尔「ふんっ！ザコが」

一夏「で？ ハンデはどうする？」

一夏に言われセシリアは気を取り戻した。

セシリア「ふつふんっ！ もうハンデの催促ですの？」

一夏「いや、俺がどのぐらいハンデを  
つけるのかを聞いてるんだけど？」

アハハハハハハハツ!!

織斑くん本気で言つてる？

男が強かつたのなんてずっと前のことだよ？

ハンデ貰うのは織斑くん達だつて

ジャツキン

三人目が言い終わる前に終尔は拡張領域に入っているビットを笑った女子全員の頭に当たた。女子は固まり涙目の者もいた。

終尔「何か言つたか？」

何か今かなりなめられたこと言われたけど  
男が強かつたのなんてずっと前？

ハンデを貰うのは俺ら？

なら、IS使わずに今ビットを当てている全員

ナイフ一本持つて、俺と闘つてみるか？

男より強いんだろ？」

ご、ごめんなさい

う、撃たないで

ゆ、許してください

いや…怖い

千冬 「綺堂やりすぎだ。 納めろ」

終尔 「チツ」

終尔はビットを納めた

終尔 「女尊男卑だか、なんだか知らんが

俺と一夏は I S に乗れる

その時点でお前達のアドバンテージは無いんだよ。

だから、ハンデはいらない

あと、さつき言い忘れたが

このクラスの実力トップはお前じやない俺だ!!

セシリア 「なつ!?」

終尔 「それを今度じっくりとその身に刻んでやる」

千冬 「話は纏まつたな？ では、1週間後に

クラス代表決定戦を行う!!

では、授業を始める!!」

## I.S 学園初日（午後）

その後、時間は進み昼休みとなつた。

終尔は簪と約束していたため、4組に行き  
簪と合流した。一夏と一緒に食おうと誘われたが  
約束があると断つた。

終尔「うわあ結構いっぱいだなあ

簪、俺が貰つてくるから、席頼んでいいか？」

簪「うん、わかつた」

終尔「簪は何にする？」

簪「かき揚げうどんがいいな」

終尔「りよーかい、じや席頼むな」

終尔はカウンターに向かい、簪は席を探しに向かつた  
簪が探していると、窓際のテーブルが

1つ空いていたのを見つけ、

水の入ったコップを2つ置き

終尔が来るのを待つた。

終尔「簪？」

簪「あっ！こつちこつち！」

終尔が探していたため、手を上げて終尔を呼ぶ

終尔「広いから、探すのも大変だなこりや」

簪「そうだね」

終尔は簪を見つけ簪の前に

食事を置きてーブルに座つた。

二人は笑いながら言つた。

簪「じや、食べよう？」

終尔「そうだな」

終尔「簪『いただきます』

終尔と簪が食事していると、一夏が來た

一夏「終尔悪い、相席いいか？」

他に空いてなくつてさ」

終尔「俺はいいけど、簪いいか?」

簪「終尔がいいなら、いいよ」

一夏「サンキューおーい 簪こつちだ」

簫「綺堂、相席すまんな

そつちの女子も」

終尔「いいさ、これぐらい」

簫「そちらの女子は初めてだな

1組の篠ノ之 簫だ。よろしく頼む」

一夏「同じ1組の織斑 一夏だ。よろしく」

簪「4組の更識 簪です。お姉ちゃんがいるから私のことは簪って呼んでね?」

一夏「じゃあ、俺も千冬姉がいるから一夏で呼んでくれ」

3人は自己紹介も終わり、食事に入り

その後、雑談していた。

簪「へえーいきなり模擬戦やるんだ。大変だね?」

一夏「ああ、面倒なことになつちまったく

今さら後悔してる」

簫「自業自得だ」

終尔「同感」

一夏「ぐつ!!」

簪「でも、終尔もやるんでしょう?」

終尔「主に一夏のせいでは?」

一夏「うつ!!!」

簪「でも、終尔に闘いを挑むなんてその人もバカだね」

一夏「えつ? 簪さんそれどうゆう「ちよつといいかな?」えつ? 知らない人が話しかけて来た

「君たち代表候補生と模擬戦やるんでしょう?」

リボンの色からして上級生だな

一夏「ああ、はい、まあ」

「I.Sの操縦は大丈夫?なんなら見てあげようか?」

一夏 「ああぜひお願 篠「結構です」 篠?」

篠「私が見ることになつてますから」

「でもあなたも一年でしょ?」

篠「私は篠ノ之 束の妹ですから」

「えつ!?そ、そう、ならそつちの子は?」

終尔「俺も大丈夫です。この子に見てもらいますから」

篠「えつ!?

終尔は篠の肩に手を置いた

篠「ちよつと!終尔!?

「その子は?」

終尔「日本代表候補生の更識 篠さんです。」

「ああ楯無さんの妹さん」

篠「お姉ちゃんの知り合いでですか?」

「一年の時クラスメイトだつたの

あの子の妹さんなら大丈夫ね」

終尔「はい

気にしてもらつてありがとうございます」

「いいのよ、興味本位だしじゃあね」

知らない先輩は去つていった

篠「終尔、私なにも聞いてないんですけど?」

終尔「嫌だつた?嫌なら楯無さんに

頼むか一人でやるけど?」

篠「ん!終尔その言い方ズルい!」

終尔「引き受けてくれる?」

篠「…今度、専用機の整備手伝つてもらうから」

終尔「はいはい」

篠「一夏、明日から放課後剣道場に来い

剣の腕を見てやる」

一夏 「ああわかつた」

篠は自分のトレイを持って去つていった

一夏もその後をおつていった

終尔「そういえば、専用機はどんな感じ?」

簪「後は稼働データだから、

クラス代表戦に間に合いそう」

終尔「そつか、ならちようど良かつたじやん」

簪「うん!でも、それとさつきのとは話は別」

終尔「そう怒るなつて、今度買い物に  
付き合つてやるから」

簪「約束だよ?」

終尔「はいはい

じゃ、そろそろ行くか?」

簪「そうだね」

終尔は簪と自分のトレイを持って立ち上がり  
カウンターに返し、簪と共に教室に向かつた

そこに真耶が入つてくる。  
午後の授業も終わり、ほとんど生徒が居ない教室で  
一夏と終尔はクラスメイトを含め雑談していた。

真耶「ああ、綺堂くんに織斑くん  
教室に居たんですね。良かつた」

終尔「山田先生どうされました?」

真耶「お二人の寮の部屋が決まつたので、  
鍵を持つてきました。」

一夏「鍵?俺、1週間は自宅から  
通うように言われたんですけど?」

終尔「俺もホテルから通うように言われましたよ?」

真耶「それは「それは私が説明しよう」  
あつ、織斑先生」

今度は千冬が教室に入つてきた  
千冬「政府の判断で登下校中に襲撃にあう可能性  
を懸念して、急遽入寮させたのだ」

一夏 「じや、家に荷物取りに行かないと」

千冬 「お前のは私が持つてきた。

着替えと携帯の充電器だけあれば、休日でもつだらう？あとは休日に取つてこい」

一夏 「わかつた、ありがとう千冬姉」スパン

千冬 「織斑先生だ。それと教師には敬語を使え」

一夏 「ぐおおつ!!」

終尔 「俺もホテルから荷物移さないと」

千冬 「お前のも大丈夫だ。お前の会社の社長が手を回して、ホテルから持つてきて貰つた」

終尔 「誰が持つてきたんですか？」

千冬 「お前のお母様だ。

ちゃんとお礼を言つておけよ？」

終尔 「分かりました」（後で礼を言つとこう）

真耶 「では、綺堂くんはこちら

織斑くんはこちらになります。

無くさないようにしてくださいね？」

一夏 「あれつ？番号が違いますけど？」

終尔 「ほんとだ、俺たち別々ですか？」

真耶 「はい、急遽決めたもので

女子と相部屋になります。」

千冬 「空きが出来次第、都合をつける  
それまで辛抱しろ」

終尔 「分かりました」

一夏 「はい」

真耶 「あとお二人は大浴場が今のところ使えません」

終尔 「そうですか、ならシャワーで我慢します」

一夏 「えつ？何ですか？」

終尔 「一夏、お前は女子が

いっぱい居る大浴場に行きたいのか？

まあ男だからな、そうゆう欲求もあるか」

真耶 「だつ、駄目ですよつ!? 織斑くんつ!!」

一夏 「いやつ!は、入りたくないですかつ!!」

真耶 「えつ!? 女子に興味無いんですかつ!?

それもそれで問題なような…」

終尔 「はあ」

千冬 「綺堂ため息はやめてくれ、  
私もこれにはまいつてる」

終尔 「大変ですね、織斑先生も」

千冬 「言うな、余計に辛くなる」

真耶 「あ、あと食堂は時間指定があるので、確認しておいてくださいね?」

終尔 「分かりました。ありがとうございます」

一夏 「んじや、行くか終尔」

終尔 「ああ」

終尔と一夏は寮に向かつて歩きだした  
寮に着き、一夏と別れ、部屋に向かつた  
自分の部屋を見つけ、ノックをした。

??? 「はい?』

終尔 「同室になつた者だ」

???『終尔?』ガチャ

終尔 「簪?あれ? 同室の相手つて簪なの?」

簪 「私はここの部屋だけど、終尔も?」

終尔 「ああ、さつき山田先生に貰つた」

簪 「そつかとりあえず入つたら?」

終尔 「ああお邪魔します」

簪 「そこはただいまいいんじやない?」

終尔 「そうだな…ただいま簪」

簪 「うん! おかえり終尔」

ハロ 「タダイマ タダイマ」

簪 「ハロもおかえり」

終尔 「簪は荷ほどきは終わつてゐるのか?」

簪「うん、そんなに持ってきてないから  
手伝おうか？」

終尔「俺もそんなにないから、いいよ  
終わつたら、一緒に夕食食べに行こうか？」

簪「うん！」

その後、終尔の荷ほどきが終わり  
食堂で夕食をとつた二人は部屋に戻り  
明日の話などをしていた。

簪「終尔、明日から訓練するの？」

終尔「そうだね、慢心で負けたくないし」

簪「終尔なら負けないとと思うけど」

終尔「それでも、強くなれるだけ強くなりたいからな  
簪「そつか、明日は専用機の微調整したりするから」

終尔「そつか、なら俺もそつちに行こうか？」

簪「大丈夫だよ、微調整だけだから

明後日は機体の稼働データ取るために  
模擬戦してくれる？」

終尔「いいよ」

簪「ありがとう」

終尔「じゃ、そろそろ寝るか」

簪「そうだね、おやすみ、終尔」

終尔「おやすみ、簪」

二人はそれぞれのベットに入り就寝した。  
こうして、IS学園の初日は終わつた。

## 決闘までの準備

外はまだ太陽が登り始めた頃に終尔は目を覚ました。  
習慣となり、終尔は目覚まし無しでも  
この時間に起きる。

終尔「んく朝か」フニツ

終尔「ん？」

終尔が手を横に置くと何かがあつた

終尔「またか」

簪「ん、スウ」

簪は寝ぼけグセがあり

寝ぼけてトイレに行つたあと

他の人の布団などで寝たりする。

終尔（起こさないようにしないとな）

終尔はトレーニングウェアに着替え  
簪を起こさないように外に出た。

その後、日課のトレーニングを済ませ  
部屋に戻るために廊下を歩いていると  
前から千冬が歩いてきた。

千冬「ん？ 綺堂か、こんな朝からどうした？」

終尔「日課のトレーニングですよ。織斑先生」

千冬「まだ始業時間じゃないから、  
千冬さんでいいぞ

トレーニングはいいが、静かにな。

まだ寝ている生徒も多いからな」

終尔「分かりました。千冬さん」

千冬「ではな、遅刻するなよ？」

終尔「しませんよ」

終尔は千冬と別れ自室に入つた

終尔は部屋に入るとベットを確認した

簪「スウスウ」

終尔は簪がまだ寝ていることを確認すると  
静かにシャワーを浴び制服を着たあと  
簪を起こした

終尔「簪、朝だぞ」

簪「ん？ん、おふあよ～」ウトウト

終尔「起きないと遅刻するぞ？」

簪「…うん」ノソツ

簪は寝ぼけ眼で起き上がる

終尔（やれやれ）

終尔は内心笑いながら、コーヒーを入れ

簪に手渡した

終尔「簪、ほら」

簪「ありがと：おいし」

終尔「目は覚めたか？」

簪「うん、着替えるね」

簪はシャワールームに入り、制服に着替えた

簪が出てくると、二人で食堂に行きカウンターで  
食事を受け取り、テーブルを探していると

本音が声をかけた。

本音「お～い、かんちや～ん、しゅ～う～」

簪「あつ、本音」

終尔「おはよう、本音、清香、癒子、さゆか」

癒子「おはよう終尔くん」

清香「おつはろー終尔くん」

さゆか「終尔くん、おはよう」

終尔「相席いいか？」

清香「いいよ、どうぞ」

簪「ありがとう」

癒子「終尔くん、朝からスゴいね」

清香「確かに」

さゆか「うん」

終尔「そうか？」

清香「簪さんと本音は驚かないの？」

簪「見慣れたかな？」

本音「そうだね〜」

終尔の食事は二人前ほどあつた

終尔「朝の食事はエネルギーに変わりやすいから朝の食事は結構大事だよ？」

清香「へえーなんだ、私もスポーツするから朝はしつかり食べようかな」

終尔たちは食事を済ませ食堂を後にした。

教室前にて、簪と別れ終尔たちは教室に入つた。

始業時間となり千冬が入つてきた

千冬「S H Rを始める！」

まず、織斑

お前には専用機が与えられることになつた

一夏「え？ 専用機？」

千冬「お前、参考書はちゃんと読んだか？」

一夏「いえ、まだ途中で」

千冬「ハア、綺堂教えてやれ」

終尔「はい

いいか、一夏、お前に分かりやすく教えてやる

I Sには数に限りがあつて、I Sコアは4 6 7しかないつまり、専用機を与えられるのは

名譽あることだと

言うことだ。わかつたか？」

一夏「ああ、なんとなく」

イイナー

ワタシモホシイナー

千冬「静かにしろ！」

では、連絡事項も特ないので

S H R を終わる。各自授業の準備をしておくように

セシリ亞「安心しましたわ

訓練機では勝負は目に見えてますものね」

一夏「ん? 何でだ?」

セシリ亞「このセシリ亞・オルコットは代表候補生つまり、すでに専用機を持っているのですわ!」

一夏「へえ、そうなのか」

セシリ亞「まあそちらの男子は訓練機で私と闘う時点で勝負は目に見えてますわね」

終尔「うるさい三下」

セシリ亞「なつ!」

終尔「昨日、見てなかつたか?」

あのビットは俺の専用機の武装だ

専用機を持つてるのは、お前だけじゃないんだよ』

セシリ亞「なつ!? 何ですつて!?」

終尔「いちいちうるさいな、お前は

一夏、先生が来たら私用で出たつて言つといてくれ

一夏「ああわかつた」

セシリ亞「ちよつと!? 待ちなさいアナタ!!」

終尔はオルコットを無視して教室を後にした

整備室

終尔は1人、整備室でハロを繋いだパソコンにむかっていた。

終尔（機体は使えるが、全ての機能が使えない

サバーニヤやエクシアはTRANSA-Mが使えない

紅蓮やランスロットも独自の武装が使えない

何か使うのに鍵があるのか?）

終尔が考えごとしていると千冬が入ってきた

千冬「綺堂、授業をサボるな」

終尔「私用で休むと伝言を頼みましたよ?」

千冬「専用機の整備か?」

終尔 「まあそんなところです」

千冬 「ふつ、まあいい

サボるのもほどほどにしろよ?」

終尔 「わかってますよ」

千冬 「オルコットの件だが、再起不能まで持ち込むなよ?」

終尔 「それこそ、愚問ですね

あそこまで、大口を叩くヤツに手加減なぞしませんよ上には上がいることを思い知らせてやります。

それでアイツが潰れたら、そこまでのヤツだつたと言ふことでしょう」

千冬 「まあそれも一理あるがな  
だがそれでも、一言だけ言っておく

やりすぎるなよ?」

終尔 「分かりました」

千冬 「今日は多目に見るが、明日からは  
ちゃんと授業に出るよ?」

終尔 「了解です」

千冬 「ではな」

千冬が出ていった後も終尔はパソコンにむかっていた  
時は過ぎ、放課後

終尔は本音に付き合つてもらい  
アリーナにて訓練をしていた

本音 「アシスト有りだと、96%

アシスト無しだと、68%だね?」

終尔 「やつぱり、アシスト無しだと

命中率がかなり下がるな」

本音 「それでも十分スゴいと思うよ?」

終尔 「アシスト無しでも90はいかないとな

本音 「しゅうは頑張りやさんだね?」

終尔 「そもそもないさ

ドローンの操作よろしくな」

本音「あいあいさく」

終尔はまた訓練に戻り、少しすると  
簪がやってきた。

簪「本音、どう？」

本音「アシスト無しだと命中率が下がるつて  
また訓練に戻つたよ」

簪「データある？」

本音「これだよ」

簪「ん？ 十分終尔は強いと思うけどね」

本音「かんちゃんもそう思うよね」  
でも、しゅうに言つたけど90は  
いかないとダメだつて」

簪「そつか」

終尔が訓練を終わり戻つてきた

簪「お疲れ様、終尔」

終尔「來てたのか

模擬戦：は時間的に無理だな

データはどうだ？ 本音

本音「あんまり変わらないよ」

終尔「そうか」

簪「終尔、今日はもう終わつたら？  
あんまり無理すると、よくないよ？」

終尔「そうだな、今日はもう帰るか」

本音「りょくかい」

その後、3人は寮に戻りシャワーを浴び食堂にて  
夕食をとり、就寝した。

その後、決闘の前日までは模擬戦を交えながら  
簪の機体の稼働データを集め訓練にはげんだ。

# 決闘!! 終尔ＶＳセシリア!

決闘の日 アリーナ

このアリーナのピットには一夏、簪、終尔、簪、千冬の5人が集まっていた。

一夏「なあ、簪

俺、ISの特訓、全然出来てないんだけど?」

簪「…」

一夏「簪?」

簪「…」パイツ

一夏「目をそらすなっ!!」

簪「しつ、仕方ないだろう!」

アリーナの訓練機が借りれなかつたんだから」

一夏「それでも、座学でも教えられること

はあるだろうつ!?」

簪「…」パイツ

一夏「だから、目をそらすなっ!!」

簪「一夏、少しは静かにしてよ

終尔が起きちゃうでしょ?」

一夏「あ、すまん」

終尔はアリーナに着いて早々に

簪に眠いといい、膝枕をしてもらい寝ていた。

簪「にしても、お前の専用機はいつ来るのだ?」

一夏「話をそらすな!!」

終尔「うるせえな、一夏」

一夏「あ、悪い起こしたか?」

終尔「あー、眠い」

簪「おはよ、終尔。すこしは眠れた?」

終尔「ああ、ありがとな簪」

二人は微笑みあつていた

はたから、見ればカツプルである

終尔「あーあ、だいたい聞いてたけど  
この1週間、剣道はしてたんだろ？」

なら無駄つてわけじゃないさ

結局、動かすのは自分だからな

機体が良くても、体がついていかないじや  
意味無いしな」

篝「ほ、ほら見ろ！」

終尔「ただ、一夏の機体に剣が  
装備されてなかつたら半分は無駄だがな」

篝「うつ！」

終尔「ついでにいえば、座学がどうこう言うなら  
夜に部屋で自分で出来ただろ」

一夏「うつ！」

終尔「自分で少しほは動けよ？ 一夏」

一夏「わ、わかった」

終尔「にしてもこねえな」

一夏の機体は予定よりかなり遅れていた

千冬「仕方ないな

綺堂、機体はすぐに使えるか？」

終尔「ハロ」

ハロ「モンダイナイ モンダイナイ」

終尔「だそうです」

千冬「なら、すぐに準備をしてくれ  
先にお前とオルコットの試合をする」

終尔「りよーかい」

終尔は拡張領域に入れてある、  
ISスーツを高速切替の要領で制服を

拡張領域に入れISスーツを着た

一夏「終尔のISの待機形態つてどんなのだ？」

終尔「ん？ コレ」ピッ

ハロ「ハロ ハロ テヤンディ」

終尔はハロを指差した

一夏 簪「え？」

終尔「だから、コレ」パシツヒヨイ

ハロ「ハロ ハロ」

一夏 簪「ええええーーーー!!??」

千冬「本當だ、綺堂のISは

待機形態がこのハロだ」

ハロ「カンザシ カンザシ」

簪「よしよし」ナデナデ

一夏「ISつて色々あるんだな」

千冬「ん？綺堂、オルコットの準備が出来たそうだ

カタパルトに移動して出撃しろ」

終尔「はいよ、ハロ行くぜ」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔「来いっ！サバーニャ！」

終尔が光に包まれ、光が消えると全身装甲の白と緑のカラーをした。機体が現れた。

一夏「これが、終尔の機体」

簪「カツコいい、終尔」

終尔「ありがとな、じや行つてくるわ」

簪「うん、私は管制室でデータ取つてるね」

終尔「よろしく」

簪「じや、後でね。」

負けたらおしおきだからね？」

終尔「勝つたら、もつかい膝枕な？」

簪は管制室に向かつた

終尔「じや、俺も行くか」

終尔はカタパルトに向かつた

カタパルトに着き、出撃しようとすると

一夏が声をかけた

一夏「終尔つ！」

終尔「ん？」

一夏「勝つてこいよ？」

終尔「当然だ」

真耶「綺堂くん、射出準備完了

いつでも発進していいですよ？」

終尔「……」

終尔はゲンナリしていた

真耶「ど、どうしました？ 綺堂くん」

終尔「何かヤダ」

真耶「や、ヤダって」

終尔「さつきのセリフ何かヤダ」

真耶「や、ヤダって言われましても」

終尔「簪、コレ読んで発進ナビして」ピッピッピッピ

簪「ん？んくん！ わかった」

簪「ん、んん！」

サバーニヤ 射出準備完了 リニアボルテージ上昇

730を突破 進路クリア 射出タイミングを

綺堂 終尔に譲渡します！」

終尔「オーライ ガンダムサバーニヤ

狙い撃つぜ!!」ノリノリ

終尔の機体が射出された。

先に出ていた、セシリリアが終尔を見ると  
見下すように告げた。

セシリリア「あら？ 逃げずに来ましたのね

それにも、全身装甲タイプとは

そんな型遅れの機体で私に勝てると思っていますの？」

終尔「……」

「あれが綺堂くんのIS」

「全身装甲で珍しいね」

「でも、カッコいい」

セシリ亞 「最後のチャンスをあげますわ

今すぐ土下座して謝れば、許してあげますわよ？」

終尔 「……」

セシリ亞 「聞いていますの？」

それとも、今さら怖くて声も出ませんの？」

終尔 「べらべらとうるせえな

お前の国では対戦前に敵と話すのが常識なのか？

あいにく、俺はそんな主義ないんでね」

セシリ亞 「なつ!? またバカにして！」

もう容赦しませんわ！」

終尔 「試合を始める前に賭けをしないか？」

セシリ亞 「賭けですって？」

終尔 「ああ、お前言つたよな？」

負けたら奴隸にするとか」

セシリ亞 「ええ、言いましたわね

撤回してくれとでもおつしやりたいのですの？」

終尔 「いや、俺が負けたら奴隸にでも

何でもなつてやるよ

その代わり、お前が負けたらこのデータを  
全国の I S 委員会に送る」

終尔の I S からオープンチャンネルでデータが流れれた  
実力からいえば、このセシリ亞・オルコットが  
クラス代表になるのは当然：

セシリ亞 「これは、まさか!？」

終尔 「そう、あの時のお前の演説

これを各国の I S 委員会が聞いたらどう思うかな?」

セシリ亞の顔はみるみる青ざめていく

終尔 「まあお前が勝てばいいだけのことだ

負けたら、お前がどうなるか

俺はすごく楽しみだけどな

代表候補、爵位、専用機の剥奪

財産押収に永久投獄どこまでつくだろうな?」

セシリア「あつ、あつ、ああ」

セシリアの顔は青ざめ、恐怖に染まっていた

終尔「さあ」

3 終尔「試合を」

2 終尔「始めようぜ」

1 G O !!

セシリア「いやあああ!!」

セシリアは恐怖にかられ、試合開始と同時に

引き金を引いた。

終尔「ふつ」

終尔は動かずに体を反らしかわした

セシリア「くつ！」

終尔「当たらんな」

セシリア「くつ！ティアーズ!!」

終尔「これか」

セシリアの声と共にビットが

彼女のもとを離れ、終尔のもとに向かう

終尔を取り囮むように浮かび

各ビットが終尔に向けて射撃を行う

終尔「ふつ、よつ、ほつ」

終尔は全てのビットの射撃をかわす

セシリア「くつ！なぜ当たりませんのつ!?」

終尔「お前の射撃が下手だからだ」

セシリア「またバカにして!!」

「前日」

アリーナ

訓練を終えた終尔と簪はピットで翌日の決闘について話していた

簪「やっぱリアリスト無しじや今は75が限界だね」

終尔「そうだな

まあ決闘の方はなんとかなるだろ

???「心配いらないわよ終尔くん」

終尔「ん？」

簪「あつ」

終尔「楯無さん」

簪「お姉ちゃん」

更識 権無「やつほー終尔くん簪ちゃん」

終尔「心配ないつてどういうことです？」

楯無「イギリスの代表候補生と決闘するんでしょ？」

だから、少し情報持ってきてあげたの」

終尔「それはありがとうございます」

簪「お姉ちゃん、情報つて？」

楯無「うん、まず終尔くんが

本気を出すまでも無いわ

彼女は与えられた機体の性能を

50%しか使えてないわ」

終尔「ずいぶん低いですね」

楯無「彼女の機体ブルーティアーズは

ビットを使つた射撃戦が得意なんだけど

彼女に問題が1つ」

終尔「並行思考が出来ない？」

楯無「御名答

ビットを使うと本体の動きが止まり

本体が動くとビットが止まる

だから、性能をフルにいかせない

だから、終尔くんが本気を出すまでも無いのよ」  
終尔「なるほど、情報ありがとうございます」

「現在」

終尔は攻撃をかわしながら

前日の楯無との会話を思い出していた

終尔（聞いてたとおりだな

本体が撃つときはビットが止まり  
ビットが動くと本体が止まる）

セシリア「このつ！いい加減に落ちなさい！！」

終尔「なあ、お前何でそんなに男を見下すんだ？」

セシリア「ふんっ！男なぞ子を産む以外に

使い道が無い、下等な生き物だからに

決まっていますわ！」

終尔「そうか、お前の歪んだ考えを

俺は絶対に認めない!!」

セシリア「なら、どうすると言うんですの？」

終尔「決まっている

お前の歪んだ考えはやがて、

世界を滅ぼしかねない

それを止めるためにここでお前を叩き潰すっ！」

カツ!!

その瞬間、サバーニヤが光だした。

そして終尔の目の前に

ウインドウが現れ文字が表示された

お前のまっすぐな思い見届けたぜ

俺の力、存分に使いな

『初期化と最適化が終了しました

確認ボタンを押してください』

武装を確認すると使えなかつた

装備が解放されていた

終尔（解放された？やはり鍵があつたらしいな）

セシリ亞「あつ!? あなた初期設定のまま

闘っていたんですねの!?」

終尔「そららしいな

さて、覚悟はいいか?

世界の歪み、全力で狙い撃つぜっ!!

終尔はGNスナイパーライフルⅢを

セシリ亞に向かつて発射した。

セシリ亞「くつ！」

セシリ亞は紙一重でかわした

終尔は高速で飛行しながらライフルを撃ち

セシリ亞は紙一重でかわしていく

セシリ亞（こんな男に苦戦するとは…）

終尔「射撃つて言うのはこうやるんだよ

三流スナイパーさん」

セシリ亞「くうつ！ ティアーズ!!」

終尔「各の違いを見せてやる

ライフルビット展開!!」

セシリ亞のビット4機と

サバニヤのビット16機が  
共にアリーナに放たれた

セシリ亞「なつ?! ビット兵器!？」

終尔「使えるのはお前の国だけじゃないんだよ」

セシリ亞「ですが、そんな数操れるわけが」

終尔「言つたろ？ 各の違いを見せてやるつてな!!」

終尔は旋回しながらビットを操作し

自らも攻撃しながら

セシリ亞のビットを全て撃ち落とし

セシリ亞にもダメージを与えていく

セシリ亞「そんな！ ティアーズが！」

終尔「これで終わりにしてやるよ

行くぜ！ ハロ！」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔はマルチロックオンシステムを起動して、セシリ亞に多重ロックをかける  
終尔「乱れ撃つぜえっ!!」

終尔はビットとGNマルチミサイル

GNスナイパーライフルⅢ×2

全てを使いセシリ亞を撃ち

セシリ亞のシールドエネルギーを削り取り、セシリ亞を落とした

『試合終了

勝者

綺堂 終尔』

終尔はピットに戻り、簪が出迎えた

簪「お疲れ様、終尔」

終尔「楯無さんの言つたとおりだな

本気を出すまでもなかつたわ」

簪「最後に少しだしたでしょ?」

終尔「ビットの操作だけな」

千冬「綺堂、やりすぎるなと言つたはずだが?」

終尔「殺してはないでしょ?」

千冬「まあ、いいか

オルコットは予備バーツで

機体を修理する時間が必要だ

だから、お前と織斑の試合を先にやる

終尔「來たんですか?」

千冬「試合が終わる、5分前にな」

終尔「なるほど、なら準備をします」

千冬「頼む」

# 決闘!! 終尔 VS 一夏!

アリーナ ピット

終尔は一夏との決闘の準備を始めていた

終尔「千冬さん、一夏の機体データありますか?」

千冬「無い、それに一次移行も終わっていないから見ても一緒だろう」

終尔「それもそうですね」

千冬「だが、コンセプトは接近型だ」

終尔「なるほど、なら機体は決まりだな一夏、男同士の闘いで手加減はしないのが当たり前だが、それだとすぐに終わつてお前の経験値もたまらないから

少しハンデをつける」

一夏「ちょっと、悔しいけど助かる」

終尔「じゃあ後でな」

終尔は反対のピットに向かつた

千冬「一夏、綺堂はハンデをつけると言つたが、あくまでも決闘に手加減はしない気を抜いて、挑むなよ?」

一夏「わかった、ありがとう千冬姉」

一夏「ハンデ」

一夏「何だ?」

一夏「行つてくる」

一夏「あ、ああ! 勝つてこい!」

一方、反対のピット

終尔「ハロ、機体チエンジ

ガンダムエクシア」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔「来いつ! エクシアっ!!」

簪『終尔、一夏の発進準備完了したよ』

終尔「わかつた、こつちも出る

ナビゲートよろしく」

簪『うん、エクシア カタパルトプットオン  
射出準備完了 リニアボルテージ上昇

730を突破 進路クリア 射出タイミングを  
綺堂終尔に譲渡します』

終尔「了解 ガンダムエクシア

綺堂終尔 出る!』

真耶『織斑くん、射出準備完了

いつでも発進してください』

一夏「分かりました

織斑一夏 白式 行きます!』

二人は同時にアリーナに飛び出した

一夏「あれ? 終尔、機体変わつてないか?』

終尔「ああ、俺の機体の能力でな  
さまざまな機体を使える』

一夏「へえ!』

終尔「さて、一夏

男同士の鬭いだ、ハンデは付けるが  
手加減はしないからな?』

一夏「ちなみにハンデつて何だ?』

終尔「お前の機体、接近型だろ?』

だから、俺も接近型にした

そして、俺はこの剣しか使わない』

終尔はGNソードを一夏に向ける

一夏「他のを使つたら?』

終尔「俺の負けでいい

狙いたいなら、俺を本気させてみろ!』

一夏「わかつた

俺も男だからな、だから他の

使つたら負けのルールはいらない  
使つたら、俺に特訓をつけてくれ

終尔「ほう、いいだろう

使つたら、俺がお前に特訓をつけてやる」

終尔「じゃあ」

1 一夏「行くぜ？」

2 終尔「来いっ!! 一夏!!」

3 終尔「行いっ!! 一夏!!」

一夏「うおおおおつ!!」

G O!!

終尔と一夏は開始と同時にぶつかつた

終尔「どうしたつ？ 一夏

そんな飛びかたじやよけられないと」

一夏「こなくそつ！」

終尔「そうだつ！ 安定させろ

じゃないと、落とすぞ!!」

一夏「くうつ！」

管制室

千冬（綺堂は少し手加減しているな  
待つているのか？）

簪「終尔は待つてるみたいですね」

真耶「えつ？ な、何をですか？」

千冬「気づいたか、更識妹」

簪「ええ、終尔は一夏に回避と攻撃を

両立できるように立ち回つてる」

千冬「ほう、そこまで気づくとは

お前もなかなか出来るな」

真耶「えつ？ あ、あの私にはさっぱり」

千冬「見て、いれば分かりますよ」

アリーナ

終尔と一夏の対決が始まつて  
15分が経過した

終尔「だいぶ馴れてきたな  
飛びかたも切り方も安定してきてる」

一夏「ああ」

終尔「そろそろかな？」

一夏「なんのことだ？」

終尔「見てたら分かるさ」

終尔と一夏の剣が交わると

白式が光だす

管制室

千冬「ようやくか」

簪「みたいですね」

アリーナ

光が收まると白式がフォルムを変えていた

終尔「やつとか、以外と早かつたな」

一夏「これは？」

終尔「一次移行だ

その機体はお前の機体になつたんだよ」

一夏「俺の：機体」

終尔「さて、一夏

一次移行もすんだし

こつからは全力で行くぞ」

一夏「ああ！来いつ！終尔!!」

終尔「いいな、その目、男の目だ

なら、俺もそれにこたえてやるよ

ガンダムエクシア 目標を駆逐する！」

その瞬間、エクシアが光だした

お前の覚悟は見届けた

俺の力を使え

光がやむとエクシアはセブンソードに変化していた

一夏「終尔も終わつたらしいな」

終尔「みたいだな

仕切り直しと行くか」

一夏「ああ」

終尔「ガンダムエクシア

綺堂終尔」

一夏「織斑一夏 白式」

終尔「目標を」

一夏「行くぜっ!!」

終尔「駆逐するつ!!」

一夏と終尔は激しく切り結んでいく

一夏「うおおおお!!」

終尔「はああああっ！」

その瞬間、白式の雪片が光だした

終尔「ちつ！」

一夏「はああ！」

一夏が雪片を振り抜き

終尔は回避しきれず機体を掠める

終尔「ちつ！大した威力だな」

一夏「何だ？今の」

終尔「单一仕様能力だな」

一夏「ワ、ワンオフ？」

終尔「ワンオフアビリティ

その機体が持つ特殊な能力だ

普通なら二次移行後に発動するんだが  
その機体は特別みたいだな」

一夏「この機体の力：」

終尔「面白い

来いつ!!一夏!!」

一夏「ああ!!行くぞ!!終尔!!」

一夏と終尔は火花を散らしながら

剣と剣をぶつけあう

終尔「一夏、そろそろケリにしようぜ」

一夏「ああ、もう俺のエネルギーは  
つきかけだしな」

終尔はGNソードを

まつすぐ一夏に向ける

エクシアの背中から

GN粒子が吹き出される

一夏は雪片を持ち直し

終尔をまつすぐ見据え

雪片を構えた

終尔と一夏はお互いをまつすぐ見据え

一夏が駆け出した

一夏「うおおおお!!」

終尔「はあああ!!」

二人が近づき通りすぎるとブザーが鳴り響いた

勝者 綺堂 終尔

一夏「くそく負けたか」

終尔「最後のが決まってたら勝つてたな一夏」

一夏「くそく結局、剣しか使わせられなかつたし」

終尔「まあ訓練に励め、手伝つてやるから」

一夏「いいのか?」

終尔「暇なときぐらい付き合つてやるさ」

一夏「サンキューな終尔」

終尔「さてと、簪あとよろしく

簪『ちょっと待つて!?終尔!!

せめてピットまで戻つてきて!』

終尔「バタツ

終尔はいきなり倒れた

一夏は驚き駆け寄る

一夏「おいっ！大丈夫か？終…」

終尔「zzzz」

一夏「えつ？寝てる？」

簪『もう!! 疲れたら

すぐに寝ちゃうんだから！

一夏！終尔をピットまで運んで！」

一夏「わ、わかった！」

一夏は終尔を抱えてピットまで飛んだ  
ピット

簪はピットで一夏が来るのを待っていた

一夏「簪！終尔は大丈夫なのか？」

簪「大丈夫だよ、寝てるだけだから」「

終尔「zzzz」

一夏「あんないきなり寝るか？普通」

簪「終尔は普通じゃないから」

千冬「ご苦労だったな、織斑

オルコットとの試合だが

オルコットは修理が終わってない  
よつて、明日に持ち越すことにして  
今日は部屋に戻つて休め」

一夏「わ、わかつた」スパン

千冬「敬語を使え」

一夏「わ、分かりました：織斑先生」

千冬「さて、綺堂を部屋に運ぶか」

真耶「織斑くん、専用機についての

マニュアルです。しつかり読んでくださいね？」

真耶は笑顔で電話帳サイズの本を

一夏に渡し、一夏はゲンナリした

千冬「では、山田先生あとを頼みます」

真耶「はい」

一夏 「ちょっと待つてくれ！」

千冬 「何だ？ 織斑」

一夏 「終尔と千冬姉は知り合いなのか？」

千冬 「ドイツに居たときに一度会つただけだ

あとは綺堂に聞け」

千冬と簪は終尔を抱え

ピットを後にした

# 決闘!! 一夏ＶＳセシリ亞!!

アリーナ

セシリ亞の専用機の修理が間に合わず

翌日に持ち越された

一夏とセシリ亞の決闘を行うために

一夏、千冬、筈、終尔が

アリーナのピットに集まっていた。

終尔「何で俺まで来なきやならんの?」

一夏「まあ、そう言うなよ

ちよつとはアドバイスとかしてくれよ」

終尔「当てれば勝てる

外せば負ける、以上!!アドバイス終わり!  
じや帰る

千冬「待て、綺堂

いいから付き合え」

終尔「へいへい」

筈「一夏、油断するなよ?」

終尔「まあ、頑張れ」

一夏「サンキュー筈、終尔

それとさ、終尔…」

終尔「あ?」

一夏「オルコットのデータどうするんだ?」

終尔「決まってるだろ

全国のＩＳ委員会に送る

アイツは俺に負けた

アイツはそこまでの大言壯語をしたんだ  
当然の仕打ちだ」

一夏「その場合、オルコットはどうなるんだ?」

千冬「良くても代表候補生と専用機の押収と爵位の剥奪、悪くすれば永久投獄だろうな」

一夏「あのさ：オルコットのこと

考えなおしてくれないか？」

終尔「は？」

終尔は一夏を睨んだ

一夏「うつ！確かにアイツは日本を

馬鹿にしたけどそれだけだろ？」

だったら、そこまで本気で対処しなくてもいいんじやないか？

間違いは誰にだつてあるしさ」

終尔「違うな、間違っているぞ一夏

確かに間違いは誰にでもある

だが、許される間違いと許されない間違いがある

アイツはそれを理解していない

だからこそ、分からせてやるんだ」

一夏「でも、アイツも俺らもまだ子供だろ？」

これからがあるんだ

そんなアイツの人生を潰してまで

分からせてやることないだろ？」

それに生徒の間違いを正すのは

生徒じゃなくて、教師だろ？」

そのために終尔をここに呼んだんだろ？」

織斑先生」

千冬「ふつ、綺堂を残した理由はさておき織斑の言葉は正論だな」

終尔「はいはい、分かりましたよ。ハロ」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔はハロからデータの入ったメモリを取りだし千冬に渡した

千冬「まあここからは私の仕事だな」

終尔「お任せしますよ」

一夏「ありがとな終尔」

終尔「別に礼を言わることはしてないさ  
じや、俺は戻るぞ」

終尔はピツトを出でいった

廊下

終尔「やれやれ、一夏はお人好し過ぎるな  
まあ、それがこの先どうなるかが見物だがな」  
終尔はそう呟くと自室へと戻つていった

アリーナ

千冬「さて、オルコットの準備が出来たそ�だ  
織斑、カタパルトに移動しろ」

一夏「分かりました」

筈「一夏、今度こそ勝つてこい！」

一夏「ああ!!行つてくる!!」

真耶『織斑くん、射出準備完了です！  
いつでもどうぞ！』

一夏「はい！織斑一夏　白式 行きます！」

一夏がアリーナに出るとセシリ亞も出てきた

一夏「今日はよろしくな」

セシリ亞「ふつ」

セシリ亞はどうでもよさそうに笑う

一夏「どうした？」

セシリ亞「もうどうでもいいですわ  
勝つても負けても

私の未来は決まっていますもの」

一夏「あー昨日のことか？」

セシリ亞「ええ、私は負けた

つまり、私のあの発言が I S 委員会に知れ渡る  
そうなれば、未来はもう見えていますわ」

一夏「あー、それな

無くなつたぞ？」

セシリ亞「えつ？」

セシリ亞は驚き一夏のほうを見た

一夏「終尔に頼んでな

無かつたことには出来なかつたけど

千冬ね：織斑先生にデータを渡すよう

頼んで、織斑先生に任せつて言つてたから

多分、反省文ぐらいで許してくれると思うぞ？」

セシリ亞「な、なぜそんなことを？」

一夏「だつて、何かかわいそつだからさ

確かに日本を馬鹿にしたけど

それだけで永久投獄とか爵位剥奪とか

そんな人生つぶれるようなことに

クラスメイトがなつたら後味悪いし

だから、これからやり直すことも

出来るチャンスをやつて欲しかつたんだ

つて、何か上から目線になつちやつたけど

まあ、とにかく俺はオルコットに

クラスにいてほしいんだ」

セシリ亞「そうですか？：

お気遣いありがとうございます」

（こんな男性もいるのですね…）

セシリ亞は目尻に涙を浮かべていた

一夏「じやあ、話も終わつたし

いつちよやるか！」

セシリ亞「ええ！手加減はいたしませんわよ？」

一夏「上等!!」

開始早々、セシリ亞はスターーライトで

一夏を狙い撃つ

一夏は横に移動し攻撃をよける

セシリ亞は続けてスターーライトを連射する

一夏はギリギリでよけるが

よけきれずに何発か被弾する

一夏（このままじゃジリ貧だな

試してみるか）

一夏はセシリ亞に体を向け

瞬時加速で一気にセシリ亞の懷に飛び込んだ

セシリ亞「なっ!?」

一夏（よし！成功！）

一夏はセシリ亞を切りつける

セシリ亞「くつ！ティアーズ!!」

一夏「うおっ！あぶねつ！」

一夏はビットからの射撃を回避するが  
また距離を空けられてしまう

セシリ亞「まさか瞬時加速を使うとは  
なかなか出来ますわね」

一夏「そりやどうも」

セシリ亞「ですが、もう通じませんわよ？」

一夏「それでも、ダメージは与えられたしな」

セシリ亞「もう油断はしませんわ！

行きなさい！ティアーズ!!」

一夏「くうっ！」

一夏はビットをよけ続けるが

しだいにビットのスピードになれだした

一夏（よし！だいぶなれてきたぞ）

一夏はビットにタイミングをあわせ  
ビットを破壊した

セシリ亞「!?っくう！」

一夏はビットになれ次々と破壊していく  
残り一つとなりセシリ亞はビットを戻した

一夏はチャンスと思い  
セシリ亞に向かっていく

セシリ亞「おあいにくさま！  
ビットはまだありますよ？」

一夏「ゲッ!!」

一夏はミサイルの直撃を食らった

セシリ亞「今のうちに！」

セシリ亞は距離をとろうとした

一夏「うおおおお!!」

セシリ亞「えつ!!」

一夏が煙から飛び出した

一夏は零落白夜を発動させ

セシリ亞に突撃していく

セシリ亞はあわててスターライトを構えるが照準が定まらず

一夏が先に目の前に迫る

そのまま一撃目と二撃目を受け

シールドエネルギーはつきかけ

三撃目を覚悟したときブザーがなる

『白式 シールドエネルギーエンブティ  
勝者 セシリ亞 オルコット』

一夏「えつ？」

セシリ亞「えつ？」

一夏は訳がわからずに戸惑う

セシリ亞も同様の顔をしていた

『試合は終了した

二人ともピットに戻れ』

一夏「はつ！はい！」

セシリ亞「分かりました』

二人はピットに戻った

千冬「バカ者」

ピットに戻つて最初の一言だった

一夏「あのー何で俺は負けたんですか?」

千冬「貴様が武器の特性を

理解せずに使用したからだ」

セシリア「織斑先生、どういうどこですか?」

千冬「ああ、こいつの単一仕様能力

零落白夜は相手のシールドエネルギーを

大幅に削ることが出来るが

自らのシールドエネルギーも  
削る、諸刃の剣なんだ

こいつはその特性を理解せず

使つたためシールドエネルギーが切れたのだ」

セシリア「つまり、シールドエネルギーが  
残つていたら私は負けていた?」

千冬「そういうことだな

ようはこいつが自爆したんだ」

筈「アホだな」

一夏「うつ!ぐつ!」

セシリア「そうですか?」

千冬「オルコット」

セシリア「はつ!はい!」

千冬「これが何だか分かるか?」

千冬は終尔から渡されたチップを見せる

セシリア「それは…」

千冬は床に落とし足で踏み潰した

セシリア「なつ!なにを!」

千冬「オルコット、今回のことに関しては  
不問にしてやる

だが、自分がどういう立場にいるか

自分の発言がどういう結果をもたらすか  
身をもつて知つただろう?」

セシリア「は：はい」

千冬「では、これからは気をつける以上だ」

セシリア「はい、ありがとうございます」

一夏「良かつたな」

セシリア「はい、では私はこれで」

セシリアはピットを出ていった

千冬「さて、織斑

今後は貴様もあんなみつともない  
終わりかたをしないように

訓練に励め、以上だ」

一夏「うぐっ！はい：分かりました」

千冬「では、お前も戻れ」

一夏「はい」

一夏と簪はピットを出ていった  
こうして決闘は終わつた

終尔が去つた後

終尔と簪の部屋

終尔が部屋に戻ると

簪がベッドに座り

家から持つてきた特撮物の

DVDを観ていた

簪「あれ？一夏とオルコットさんの  
試合終わつたの？」

終尔「いや、興味ないし

出てきた

簪「そつか」

簪はテレビに集中した

終尔は簪に近づき、簪を背後から抱きしめた  
簪「きやつ！」

簪は驚いたが、特に嫌がりはしなかった

簪「どうしたの？」

簪は終尔の顔を覗きこむ

終尔「ちょっと、面白いことがあつたの」

簪「そつか、一緒に観る？」

終尔「そうするかな」

終尔は簪の横に座り

一緒にDVDを観賞し

自室にて夕食を二人でとり

就寝した

## 代表決定！

教室

千冬 「では、1組のクラス代表は  
織斑 一夏とする！」

決闘の翌日、朝のS H Rにて千冬が言つた

一夏 「えつ!? 何で俺!?

終尔が2連勝したんだから、

終尔がやるんじやないの!?

終尔 「俺は忙しいから。バスだ」

一夏 「なら、オルコットがやれば」

セシリア 「私は辞退しましたわ」

一夏 「だからって、何で俺なんだよ!!」

千冬 「くどい！すでに申請は出した

もう変更は出来ん。男ならグダグダ言うな」

セシリア 「織斑先生、

少し前に出てもよろしいですか？」

千冬 「いいだろう、しかし手短にな」

セシリア 「ありがとうございます」

セシリアは教壇に上がる

セシリア 「このクラスの日本人の皆さん  
先日の皆さんや日本に対する

私の暴言の数々をここで謝罪致します。

本当に申し訳ありませんでした」

セシリアは頭を深く下げて謝罪した

⋮

クラスは静まり返つた

清香 「顔を上げなよ、オルコットさん」

セシリア 「つ！」

清香 「確かにムツときたこと言つたけど  
反省してちゃんと謝罪したんだから

それでいいんじゃない？」

さゆか「そうだね」

セシリ亞「許してくださいますの？」

本音「ちゃんと謝つたんだから

それでいいよ」

ウンウン

タシカニネ

セシリ亞「ありがとうございます皆さん」

セシリ亞は席に戻った

千冬「では、SHRはこれにて終了する！」

SHRが終わり、終尔と一夏が

話しているとセシリ亞がやってきた

セシリ亞「綺堂さん、織斑さん

少しよろしいですか？」

終尔「あ？」

一夏「ん？」

セシリ亞「先日のことを謝罪したくて  
まことに申し訳ありませんでした！」

セシリ亞は頭を深く下げる謝罪した

一夏「いや、それはもういいって

俺も飯マズとか言つたし」

終尔「俺は事実を述べただけだから

謝罪することは無いがな」

セシリ亞「綺堂さんの言葉は覚えております  
これからは心を入れ換えて、代表候補に  
恥じぬ振る舞いを心がけます」

終尔「そうしろ、データは織斑先生に  
渡したから、織斑先生に頼め」

セシリ亞「そちらは大丈夫ですわ

すでに解決いたしました」

終尔「そうか」

セシリ亞「それでこれからは交友を深めるために一夏さん、終爾さんとお呼びしても構いませんか？」

一夏「俺はいいぜ！」

終爾「好きにしろ」

セシリ亞「ありがとうございます

では、私もセシリ亞とお呼びくださいな？」

一夏「わかつたよセシリ亞」

終爾「気がむいたらな」

セシリ亞「では失礼します」

セシリ亞は席に戻つていつた

4月も終わりに差し掛かり

もうじき、クラス対抗戦が近づいてきた

1組の生徒は実習の為にアリーナにあつまつっていた

アリーナ

千冬「整列しろ」

千冬の声で全員が整列する

整列したのを見て千冬が述べる

千冬「では、これより専用機による

実習を行う。織斑、オルコット、綺堂

前に出ろ」

一夏とセシリ亞は前に出た

終尔「えーめんどい」

千冬「一発貰いたいか？」

千冬は出席簿を構えた

終尔「何も言つてません！」

終尔も並んだ

千冬「まつたく！では機体を展開しろ！」

セシリアはブルーティアーズ

終尔はサバニヤを展開した

千冬「何をしている、早くしろ」

一夏は上手く展開出来ない

終尔「一夏、名前を呼びながらやつてみろ」

一夏「わかつた、来い！白式！」

一夏はようやく展開した

千冬「遅いっ！熟練者なら1秒も掛からずに展開するぞ！よし！では、まずは

飛行を見せてもらう！飛べ！」

三人は同時に飛びたつたが

一夏は少し遅れていた

千冬「なにをしている！

サバニヤもブルーティアーズも

スペック上では白式よりも

速度は下回っているぞ！」

一夏「て言われてもなー

どうも、飛ぶイメージが掴めないんだよな」

セシリア「一夏さん、大丈夫ですか？」

千冬「なにやってんだ？一夏」

一夏「どうもまだ飛行になれなくてな」

千冬「決闘の時は飛べてたじやねえか」

一夏「あの時は無我夢中だつたし」

セシリア「一夏さん、イメージはイメージ自分の飛びやすい方法を探した方が

よろしくてよ？」

一夏「ちなみに終尔は？」

千冬「ブースターに力を込める感じかな？」

一夏「分かりにくい」

千冬「だから、イメージはイメージだつて自分で飛びやすい方法探せ」

一夏「そうする」

篝『一夏！そんなところで何をしている！早く下りてこい！』

篝が麻耶のインカムを奪い通信してきた  
そして、千冬に叩かれていた

千冬『三人共、そこから急降下と完全停止をしろ  
目標は地上から10センチだ』

セシリア「では、お先に」

セシリアが先に下りていった  
千冬「よし、10センチだな  
さすがは代表候補生だな」

終尔「行くか！」

終尔は機体を反転させ

地上に向かつて最大速度で降下した

そして、地上が近づき

再度反転させブーストを全開にし  
完全停止した

周りはその風圧により  
砂ぼこりが舞っていた

千冬「やりすぎだ！バカ者！」

目標ジャストだが、そこまでやらなくていい！」

終尔「急降下しろって言つたじやないですか？」

千冬「だからといつて、  
限界速度で下りてくるな！」

周りのことを考えろ！」

終尔「すみませんねえ」

周りを見ると風圧で吹き飛ばされた者もいた

一夏「よしつ！俺も！」

一夏も終尔の真似をしてみた  
が、やはり出来るはずもなく  
地面に激突し、グラウンドに

小さなクレーターを作った

千冬「バカ者

誰がグラウンドに穴をあけると言つた」

一夏「す、すみません」

終尔「おー綺麗に丸い穴が出来たな」

セシリア「大丈夫ですか？一夏さん」

一夏「ああありがとうセシリア」

篝「ISがあるから大丈夫に決まっているだろう」

セシリア「あら？ それでも心配するのは

当たり前のことだと思いますが？」

篝「猫かぶりめ」

セシリア「鬼の仮面よりましですわ」

千冬「そこの二人、邪魔だ

隅の方でやれ、では今日の授業はここまで  
織斑、自分で空けた穴だ

埋めておけよ？」

一夏「はい：」

終尔「IS使えばすぐに終わるだろ」

一夏「終尔、今日昼寝るから手伝ってくれよ」

終尔「金には困つてないがいいだろう」

千冬「待て、綺堂

学園長がお呼びだ、学園長室に行け」

終尔「分かりました」

一夏「学園長が？ 終尔なんかしたのか？」

終尔「いや、悪いが一夏

一人で頑張れよ？」

一夏「おう！ じや後でな」

学園長室

終尔「失礼します」

学園長「来ましたね綺堂君」

終尔「学園長殿が俺に何のようで？」

学園長「私ではありませんよ

I S委員会からあなたに依頼が来たのです」

終尔「話を聞きましょうか」

学園長「内容はBT2号機は知っていますか？」

終尔「オルコットの機体の

進化系でしたつけ？」

確かまだ試験段階のはず」

学園長「そう、その起動実験や稼働テストを

今度行うのです」

終尔「で？」

学園長「もう一つ

亡国企業は知っていますか？」

終尔「つ！」

終尔の顔つきが険しくなった

学園長「最近、活動が活発化していましてね」

終尔「そのBT2号機を狙っていると？」

学園長「先日、亡国企業に機体が何機か  
奪取されました。おそらく狙っていると見て

間違いないでしょう」

終尔「つまり、亡国企業から

BT2号機を起動テストの間守ればいんですね？」

学園長「そういうことです」

終尔「報酬の話に入りましょうか」

学園長「イギリス政府より前金で300万

成功報酬で700万だそうです」

終尔「ほう、ずいぶん出してきましたね」

学園長「それだけ必死なのです

これ以上、亡国企業の戦力拡大は

なんとしても防がねばなりません

だから、あなたにお願いするのです」

終尔「かしこまりました

綺堂 終尔、ご依頼お引き受け致します」

学園長「ありがとうございます」

終尔「出発はいつですか?」

学園長「今からです」

終尔「え?」

学園長「情報漏洩を防ぐ為に  
今日まで伏せていました

稼働テストは明日の朝からです」

終尔「つまり、今からイギリスに飛べと?」

学園長「I-Sを使えばすぐでしよう?」ニッコリ

終尔は心のなかで死ねと思つた

終尔「分かりました

出発準備をして出発いたします」

学園長「よろしくお願ひしますね

織斑先生にはだいたい話してますから

大丈夫ですよ」

終尔は自室に戻り、準備を済ませ  
その時に簪にメールをしておいた

休み時間になり簪が部屋に戻つて來た

簪「終尔、どれぐらい学園を離れるの?」

終尔「さあ?稼働テストの護衛だから

何日かは見ておいたほうがいいだろうな

簪「そつか」

簪は少ししょんぼりした

終尔「そんな顔をするな

居なくなるわけじゃない

なるべく早く帰つてくるさ」

終尔は簪の頭を撫でながら言つた

簪「うん、わかつた

終尔、早く帰つてきてね？」

終尔「はいはい」

終尔たちが話していると

千冬から通信が入った

千冬『綺堂、学園長から話しさ聞いた  
出発は海岸だと目立つからアリーナからしろ』

終尔「了解しました

じやあ行つてくるな」

簪「行つてらっしゃい」

終尔はアリーナに向かい

簪は教室に向かつて行つた

終尔「ハロ、長時間の飛行になる

フリーダムに機体変更』

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔がアリーナに着くと千冬が待つていた

千冬「來たな、出撃したら即座に上昇し

雲の上を飛べ、IS委員会に通達してあるから

国境をそのまま越えて飛んでも問題ない』

終尔「了解しました」

千冬「ではな、気をつけろよ?」

終尔「はい」

終尔は出発した

教室

真耶「では、授業を始めますけど  
その前に綺堂君は個人的な都合で  
何日か学園をあけます」

一夏「終尔はどこに行つたんですか?」

真耶「個人的な都合なのでそこまでは」

一夏「そうですか、分かりました」

真耶 「では、授業をしますね」

### 放課後教室

一夏は帰らずに終尔の机を眺めていた

一夏（終尔、どこ行つたんだろな）

簪「一夏」

一夏「ん？ 簪さん？ どうしたんだ？」

簪「終尔の机を見てたけど、終尔のこと気になる？」

一夏「うん、まあ

何かアイツは他の人とは違う感じがして  
気になるんだ」

簪「一夏……そつちの人？」

一夏「ち、が、う！」

簪「冗談だよ、ふふつ

終尔がどこに行つたかは知らないけど  
すぐに帰つてくるよ」

一夏「簪さんは終尔のことよく知つてゐるんだな」

簪「そんなに知らないよ？」

でも、私は終尔を信じてるから

それでいいの」

一夏「信じる…か

そうだな、俺も終尔を信じるよ！」

簪「うん！ ジヤ帰ろ？」

一夏「ああ！」

簪と一夏は教室を出ていった

# 終尔ＶＳ亡国企業！・1

上空 イギリス国境付近

終尔「ハロ、目的地まで後どのぐらいだ？」

ハロ「1000キロ 1000キロ」

終尔「もうちよいか」

終尔はIS学園からイギリスに向けて飛んでいた。現在はイギリスの国境付近を飛行中だった。

ハロ「ミサイル接近！ミサイル接近！」

終尔「なにつ!?」

終尔が飛行していると

数発のミサイルが飛んできた

終尔「ハロ、マルチロックは??」

ハロ「使用不可能！使用不可能！」

終尔「ちい！」

終尔は舌打ちしながらミサイルの迎撃体制に入った  
ミサイルの何発かはビームライフルと  
クスフィアスで撃ち落とし、

残りはビームサーベルで切り払つた  
終尔がミサイルの来た方向を見ると  
ラファールが3機向かつてきていた

終尔「こちらIS学園所属、綺堂終尔だ！」

現在、特務にてイギリスへと向かつていてる！

攻撃を中止せよ！繰り返す！攻撃を中止せよ！

???「はっ！そんなこと知つてるよ！

だから、攻撃してんだろうが！」

終尔「てめえ！亡国企業のオーガスか！」

オータム「オータムだ！」

てめえ！ぜつてえぶつ殺す!!

ラファールはさらに加速し向かつてきただ

終尔「くそつ！」

終尔は長時間の飛行により

疲労していた。

ラファールはマシンガンが2人

ミサイルが1人になり、終尔に集中放火を浴びせる

終尔は回避するのが精一杯だった

終尔「このまま闘うのは無理か！」

オータム「どうした！この前より歯ごたえが全然ねえぞ！」

終尔「うるせえ！ババア！」

オータム「はっ！負け犬の遠吠えか？」

終尔「このままじややられる！」

終尔はビームサーベルを展開し

マシンガンのラファールに突撃した

オータム「させるかあ！」

オータムはマシンガンを両手に持ち  
終尔を狙う、終尔はバラエーナをオータムに撃つ

オータム「ちい！」

オータムはマシンガン一丁を失うが直撃は回避した

終尔はオータムを退け別のラファールに狙いを定めた  
ラファールのマシンガンを切り落とし

蹴り飛ばし、次のラファールに狙いを定めた

オータム「クソガキがあ！」

終尔「くそつ！」

オータムが自分の武装全てを展開し

終尔の行く手を阻み、もう二機のラファールも  
それに乗じて終尔に再び集中放火を浴びせる

終尔「やべえ！もうＳＥが！」

オータム「今日こそ終わりだ！」

ハロ「危険！危険！」

終尔の機体はまだ解放されていなかっため

F S 装甲が作動しておらず

実弾でもダメージを受けてしまう

終尔は攻撃をなるべく回避していたが  
疲労により本来の動きが出来なくなつていていた

オータム「今だ！やれえ！」

ラファール3機による、

集中放火を終尔は回避しきれなかつた  
終尔は攻撃を受けS Eが尽きてしまい  
直撃を食らつた

終尔「ぐつ！」

オータム「あばよ！クソガキ」

オータムは終尔に向かつてミサイルを放つた  
終尔は自分に向かつて来る

ミサイルを見ながら自分の終わりを悟つた  
もう回避する気力も残つていない

終尔は目を閉じ覚悟を決めると

1人の顔が浮かんだ

簪（終尔、早く帰つてきてね？）

終尔「簪!!」

終尔は意識を覚醒させ、ミサイルを切り落とした

終尔「こんなところで死ねるかあ！！」

終尔の目からハイライトが消えた

終尔「ハロ、地面までの落下時間は?!」

ハロ「240秒 240秒」

終尔「サバーニヤの機体変更の時間は?!」

ハロ「120秒 120秒」

終尔「なら機体解除後、

即座にサバーニヤに機体変更！」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

オータム「しぶてえなあ！とつとと死ねえ！」

終尔は空中で機体を解除した

オータム「はつ！ 血迷ったか？」

空中で I S 無しでどうしようってんだ？」

終尔「お前なら生身で十分だ」

オータム「だつたらやつてみな！」

終尔は体の向きを変え風の流れを使い弾丸をかわす

オータム「ちい！」

オータムはマシンガンを乱射するが  
終尔には上手くかわされ、怒りで照準が  
定まつておらず終尔にはかわされる

オータム「これならどうだ！」

オータムは近接武装のナイフを展開し

終尔に向かつていき終尔に振り下ろした

終尔「甘いっ！」

終尔はオータムの腕を掴みそのまま体を回し  
腕からオータムの背中に移動した

オータム「小癪なつ！」

オータムはブーストを全開にし

終尔を振り払おうとしたが

終尔はしがみつき離れない

オータム「ならこれならどうだだ！」

オータムは急降下を始めた

終尔「くうう！」

オータム「生身でこの急降下には耐えねえだろ！」

終尔（意識がぶつ飛びそうだぜ！）

ハロ「準備完了 準備完了」

終尔「つ！！ よしつ！ 来い！ サバーニヤ！」

終尔はオータムから離れ即座にサバーニヤを展開した

オータム「ちい！ 機体を変えやがつたか！」

だが、てめえにはもうエネルギーがねえだろ！」

終尔「残念ながら、こいつのエネルギーは

本来のGNドライブからのエネルギーだから無尽蔵なんだよ！」

オータム「なんだと！」

終尔「悪いがもうお前らに付き合つてられないんでな一気に決めるぞ!!」

オータム「やつてみな！」

終尔「行くぜ！トランザム!!!」

終尔のサバニーヤが赤く染まつた

終尔はブースターを全開にし

オータム以外のラファールに向かっていく

オータム「つ!!」

オータムは終尔を追おうとしたが

スピードが追い付かなかつた

終尔「ハロ、ホルスターービット全機展開!!」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔は全てのホルスターービットを展開し

ラファールを二機撃墜した

オータム「ちい！役立たずどもが！」

終尔「残りはお前だけだ！」

オータム「悪いが簡単にやられるきはねえ！」

オータムは終尔にしがみついた

終尔「何のつもりだ！」

オータム「あばよ！」

オータムはコアを抜き取り空中に飛び自分のラファールを自爆させた

終尔「なに!?ぐああ！」

オータムは新たにアラクネを展開し飛び去つていった

終尔は爆発のダメージで意識を数秒失つたが

すぐに回復し機体を持ち直した

終尔「逃げたか、そういう作戦だつたんだろうな

倒せたら倒して、無理ならダメージを与える  
イギリスに行かせない為にここまでやるとはな  
BT 2号機を狙つてるのは間違いなさそうだな  
急ぐぜハロ！」

終尔は再度飛行を再開した

イギリス某所 I S 研究所

政府役人「遅いですね」

所長「そうですね、計算では2時間前には  
到着してもおかしくないのですが」

研究所では政府の役人と所長が終尔の到着を  
待っていた。

研究員「所長、接近する熱源があります」

所長「数は？」

研究員「1つです」

所長「通信を送つてみて」

研究員「了解、こちらイギリス I S 研究所  
接近する機体、応答せよ」

終尔『こちら I S 学園所属、綺堂終尔』

所長「ああ、出迎えを出して

表に着陸するように伝えて」

研究員「了解、こちら研究所、出迎えを出します  
指示に従つて着陸してください」

終尔『了解しました』

所長「私たちも行きましょうか」

政府役人「そうですね」

終尔は出てきた研究所の I S の指示に従い  
研究所の表に着陸すると中から

少し高年の白衣を着た女性と  
スースの若い女性が出てきた

所長「私たちも行きましょうか」

政府役人「そうですね」

終尔は出てきた研究所の I S の指示に従い  
研究所の表に着陸すると中から

少し高年の白衣を着た女性と

スースの若い女性が出てきた

終尔「到着が遅れてしまい

申し訳ありません」

所長「いえいえ、構いませんよ  
来てくださつてありがとうございます」

クリス「イギリス I S 委員会より来ましたクリスです」

シエラ「この研究所の所長をしていますシエラです」

終尔「I S 学園よりきました綺堂終尔です」

シエラ「長旅ご苦労様です

まずは中に入りましょうか」

クリス「そうですね」

終尔「了解しました」

三人は研究所に入つていった

研究所 応接室

クリス「まずは応援要請の引き受け  
ありがとうございます」

近日、亡国企業が行動を活発化し  
至る国にて機体が奪取されており

これ以上亡国企業に機体を奪われるわけにはいかず  
急遽あなたに依頼をお願いしたのです」

シエラ「現在、B T 2号機は稼働テストを行い  
データを集め微調整をすれば完成の状態  
狙われるトすれば明日の稼働テスト  
何とか機体を守つてほしいのです」

終尔「了解しました」

警備の配置はどのように?」

クリス「現在、軍よりラファールを10機  
研究所の周囲に配備しております  
稼働テストの間はこの研究所のアリーナに3機  
研究所の周囲に7機

綺堂さんには稼働テストの間はアリーナ  
上空に待機してもらう予定です」

終尔「なるほど

開始は何時ですか？」

シェラ「今から9時間後より開始します」

終尔「では、開始まで休ませてください  
何か問題が起きたら知らせてください」

シェラ「分かりました

仮眠室を用意して いますので

そちらでお休みください」

終尔「ありがとうございます」

シェラ「では、案内します」

クリス「私は一度支部に戻ります

また明日来ます」

シェラ「分かりました  
お疲れさまです」

# 終尔ＶＳ亡国企業！・2

翌朝

朝になり終尔はシエラの部下に起こされ朝食を摂り、シエラから説明を受けるために応接室に戻った

シエラ「おはようございます  
ゆっくり休めましたか？」

終尔「ええ、さつそく本題に入りましょうか」

シエラ「そうですね

まず、開始は1時間後

開始後は飛行テスト、武装テストの順に行い、その後量産機のラファールと模擬戦をして終了です。操縦者には代表候補の1人にしてもらいます

終尔「了解、代表候補は本人で間違ひはないんですね？」

シエラ「DNA鑑定で本人だと確認しています」

終尔「なら大丈夫そうですね」

シエラ「では私は準備に入ります」

終尔「私も機体整備が終わり次第警護にあたります」

シエラ「よろしくお願ひします」

終尔はシエラと別れ準備に入つた

1時間後

研究所アリーナ上空

アリーナ上空に終尔はサバニーヤを展開し待機しながら

ハロに素敵を任せ、アリーナを見ていた

終尔（あれが新型のBT2号機

機体コンセプトはサバニヤに酷似しているな  
だが、テストにもなつてないな）

テストの様子は良くなかった

パイロットの代表候補はBT適性が高くないらしく  
ビットが上手く操れず、性能を確かめられずにいた  
終尔（あれでは宝の持ち腐れだな

オルコットよりも適性は低いんじやないか？

ビット4つ程度も操れていないし

射撃の腕も高くない

あれじやテストもままならないな）

シエラ（この子じや駄目ね

ゼフィルスの性能テストも出来ないわ）

シエラは心のなかでため息をつきながら

残念に思っていた

それもそのはず、この代表候補は女性権利団体の  
役員の娘というだけで代表候補についており

操縦に関してはそこらの操縦者と変わらないのだから  
幸いにもこの研究所には男性が少なく

シエラが女尊男卑を嫌い

男性には裏方に徹してもらい  
なるべく外の人間との接触が  
ないようにしているので

この代表候補の娘と

接触させないようにしているのだ

さらに研究員が少しでも

女尊男卑のそぶりを見せれば

即解雇する徹底ぶりであり男性からしたら

この研究所で働くのは天国である

シエラ「(これ以上は無駄ね)

模擬戦の準備をしてください

それが済んだらテストは終了します」

研究員「了解」

終尔はハイパーセンサーを使い会話を聞いていた

終尔（シエラさん、諦めたな？）

まああの腕じやテストも出来んわな）

終尔はシエラの気持ちを察しており

そういうしていると模擬戦の準備が出来たようだ  
アリーナではラファールとゼフィルスの模擬戦が  
開始されており、機体の基本性能のみで

ラファールを圧倒し楽しんでいる

代表候補の姿が伺える

終尔（そろそろ終わるな）

ラファールのSEが尽き試合は終了した  
シエラ「ではテストはこれで終了とします  
綺堂さんや警備の人たちに伝えて」  
シエラが終了を言い渡すと同時に

研究所の警報が鳴り響いた

シエラ「どうしたの?!」

研究員「上空より接近する熱源を確認!!」

シエラ「数は?!」

研究員「反応確認!!ラファール3!

テンペスタ2!レーゲン2!

それとゴールデン・ドーンです！」

シエラ「なんですって!!」

終尔もハロから同じ報告を受けていた  
終尔「ちつ！ずいぶんな数出してきたな」

???「あら？お久し振りね綺堂君？」

あなたがここにいると言うことは

オータムは失敗したみたいね」

終尔「スコール・ミューゼル」

スコール「前の話し考えてくれた?」

終尔「前にも言つたぞ?」

俺はお前たちと組む気は無い!」

スコール「あら残念」

終尔はブースターを全開にしスコールに突撃した  
周りではこちらの警備と敵が衝突していた

そしてテンペスターとレーゲンがアリーナに向かつていく  
終尔「くそつ! 行かせるか!」

スコール「あら? それは私のセリフよ?」

終尔がアリーナに向かおうとすると

スコールが妨害に入った

アリーナではテンペスターとレーゲンに  
ゼフィルスが負けており、軍のI.Sが対処していたが  
対処が間に合つていなかつた

終尔「狙いはゼフィルスか!」

スコール「もちろんよ

あんな素敵な機体放つておかないとしよう?」

終尔（くそつ! 何とかこいつを!）

終尔はアリーナに向かおうとするも

スコールの妨害が激しくアリーナに向かえない

その間にも軍のI.Sが次々と落とされ

ゼフィルスは敵の手に渡つた

???『スコール、任務は完了した』

スコール「了解よ、では直ちに全機撤退」

スコールの指示で敵が撤退を始める

終尔はゼフィルスを奪つた機体を見つけ

追撃していた

スコール「駄目よ? しつこい男は嫌われるわよ?」

終尔「これ以上お前たちの好きにはさせるかあ!」

終尔はS E E D を覚醒した

終尔「ハロ! トランザムと同時にライフルビット

ホルスター・ビット全機展開!!

ゼフィルスを持つてるやつを確実に落とせ!」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔「行くぞ!トランザム!!」

サバニーヤが赤く染まり拡張領域に入れてある  
ビット計36機を展開し制御をハロに任せ  
終尔はスコールを狙い、ハロはゼフィルスを持つてる  
機体を狙つた

スコール「くつ!こんなかくし球あつたのね」

???「スコール!このままでは」

終尔「ハロ!アレやるぞ!」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔の合図でビットが全て終尔の元に戻り  
周囲に浮遊しサバニーヤの前に

3つの四角形を描き

残りのビットは敵に向いていた

終尔「フルバースト!」

ビットが連結し大出力レーザーとなり

ビット全てのレーザーと大出力レーザーにて  
フルバーストを放ち敵を薙ぎ払つた

スコール「くうつ!」

???「ちいつ!」

スコールとゼフィルスを奪つた機体もダメージを受け  
機体の至るところからスパークをしていた

スコール「引くわよエム」

エム「了解」

スコールとエムは撤退しようとしていた

終尔「させるかあ!」

終尔が突撃していく

終尔(トランザムの影響で粒子残量がヤバい!  
一機落とせればいいところか!)

スコール「しつこい！」

スコールがソリッドフレアを使い火球を作り出した

スコール「はあああ！」

終尔「ハロ！シールドビット！」

ハロ「リヨーカイ リヨーカイ」

終尔は火球を見てシールドビットを展開した

スコール「燃え尽きなさい!!」

スコールが火球を放ち

終尔はシールドビットで受け止めた

スコール「今のうちに引くわよ！エム！」

エム「ああ！」

終尔「うおおおお!!」

終尔はボロボロのまま突撃した

スコール「なつ！」

エム「ちつ！まだ！」

終尔「ハロ！ライフルビット！」

終尔がライフルとライフルビットを使い

エムを撃ち落とした

エム「うあああ！」

スコール「エム！」

終尔「あとはお前だけだ！」

スコール「残念ながら遊ぶきはないのよ！」

スコールはプロミネンスを使いレーザーを弾き

撤退した

スコール「エム、あなたは救えない

だから、もうさよならよ『ほどけなさい』

エム「!!」

エムはスコールの言葉を聞くと意識を失った

終尔（今 のセリフ？まさか！）

スコール「さよなら」

スコールはもう一度火球を作り終尔にぶつけ撤退した

ハロ「危険！危険！」

終尔「これ以上は無理か」

研究員『綺堂さん、敵は撤退しました！  
ゼフィルスも戻りました！深追いせず戻つてください』

終尔「了解」

終尔も研究所に戻り戦闘は終わつた

……

3時間後

応接室

シエラ「綺堂さん、今日はありがとうございました  
おかげでゼフィルスも無事にすみました」

終尔「いえ、任務ですから」

クリス「何とかゼフィルスは守れましたね」  
終尔「こつちもだいぶんやられましたけどね」

クリス「ええまさか、あそこまでの戦力を  
持つていたとは」

シエラ「ですが、収穫もありました」

クリス「そうですね」

終尔（俺の予想が正しければ）

……

研究所 医務室

シエラ「こんな子どもが」

見た目はまだ中学生ぐらいの  
女の子が拘束され寝むつていた

クリス「この子がエムと呼ばれていた子です」

終尔「他の奴等は？」

クリス「捕縛しようとしたのですが  
口の中に毒物を仕込んでいたようです」

終尔「優秀なこつた」

終尔は笑いながら言つた

シェラ「ええ情報を漏らさないためでしょう」

終尔（ということはやはり）

エム「んん！」

エムが目を覚ました

シェラ「目が覚めたようですね」

クリス「ええ」

エム「ここは？」

シェラ「あなた方が襲った研究所の医務室です」

エム「おそった？」

クリス「何をとぼけているの？」

終尔「待つてください」

クリス「は、はい」

終尔は女の子に近寄った

終尔「君、自分の名前わかるか？」

エム「な…まえ…マドカ？」

シェラ「年齢は？」

エム「ね…んれい？」

シェラ「綺堂さん、この子」

終尔「ええ、記憶が無い」

クリス「えつ！」

終尔「というよりおそらく亡国機業にいた間の記憶が無いんでしょう」

シェラ「洗脳」

終尔「おそらくは洗脳して扱いやすくし

忠実にするために催眠術を使つたんでしょう」

シェラ「ということは」

クリス「ですが演技ということは？」

終尔「おそらくは無いでしょう」

最後にスコールが何か言つていた

おそらくそれが催眠の鍵で

奴はこの子の催眠を解いたんでしよう」

シェラ「それにより亡国機業にいた間の記憶が消えた」

クリス「ではこの子は」

シェラ「ただの子どもと言うわけです」

終尔（やはり一筋縄ではいかんか）

エム「ここ…どこ？」

終尔はエムに近寄り優しい笑顔を向けた

終尔「初めまして俺は綺堂終尔

君はマドカでいいのかな？」

エム「うん」

終尔「詳しいことは後で話そうか、今はおやすみ」

エム「うん」

マドカは安心したのかもう一度眠りについた

終尔「場所を変えましょう」

シェラ「そうですね」

## 応接室

クリス「情報は掴めませんでしたね」

シェラ「そんなに甘い相手ではない  
と言うことでしょう」

終尔「あの子はどうしますか？」

クリス「厳重に監視して監禁しましょう  
敵があの子を狙つてくるかも」

シェラ「そうですね」

終尔「待つてください…」

あの子は俺に任せてもらえませんか？」

シェラ「え？」

終尔「あの子は俺に任せてください」

クリス「それは！」

シェラ「あの子は敵だつたんですよ?!」

終尔「その道のプロに知り合いかいます

そいつに頼んで催眠にからないようにしてもらいたい

俺が監視します」

クリス「ですが?!」

シェラ「いえ……あなたなら大丈夫でしょう」

クリス「博士！」

シェラ「ですが、条件があります」

終尔「条件？」

シェラ「これを見てください」

シェラは1枚の紙を終尔に渡した

終尔「これは？」

シェラ「あの子の検査データです」

クリス「これは…」

終尔「!!」

シェラ「あの子のIS適性及び

BT適性はずば抜けています」

終尔「つまりあの子にBT2号機を使わせると？」

シェラ「そうです」

クリス「敵に渡すのですか!?」

シェラ「敵ではありません

綺堂さんに渡すのです

あの機体をまともに扱える人は  
おそらくそういうないでしよう

ですからIS学園という守護の元

あの子に機体の稼働データを取つてほしいのです」

終尔「分かりました

引き受けましょう」

クリス「はあ：分かりました

ですが、何が起きても私は知りませんよ?」

終尔「構いませんよ」

シェラ「ではあの子をよろしくお願ひしますね?」

終尔「はい

少し電話してきます

プルルルルルルガチャ

??『はいもしもし』

終尔「母さん？終尔だけど」

沙羅『あら？終尔、久しぶりね

急に連絡してきてどうしたの？』

終尔「実はさ、頼みがあるんだけど」

沙羅『面倒なことなの？』

終尔「ちよつと」

沙羅『言つてみなさい』

終尔「女の子を引き取つたんだけど」

沙羅『ブフウ!!』

沙羅はコーヒーの飲みかけを吹き出した

沙羅『ゲホツ！ゲホツ！どういうこと？』

終尔「敵の手に捕まつてた子を救出したんだ  
だが身寄りが無いから俺が引き取つたんだけど  
年齢的に親になるのは無理だから  
妹にしようかと思つて」

沙羅『はあそういうことね  
良いわよ、娘が欲しかつたし』

終尔「いいの？」

沙羅『止めて聞くの？』

終尔「よくお分かりで」

沙羅『当たり前でしよう？

あなたは私の息子よ？』

終尔「恩に着るよ母さん」

沙羅『ええ一度家に連れてきなさい』

終尔「わかつたよ  
じやあまた連絡する』

沙羅『ええ元気でね』ガチャ

終尔「ふう』

シェラ「すみましたか？」

終尔「ええあの子のところに行きましょうか」

### 医務室

終尔「マドカ」

マドカ「ん？」

マドカは目を覚ました

マドカ「あつさつきの」

終尔「綺堂終尔だよ」

マドカ「私はどうなるの？」

終尔「驚かずに聞いてね？」

君は今日から俺の妹になるんだよ？」

マドカ「妹？」

終尔「そう、今日から家族になるんだよ」

マドカ「……」

マドカは下を向いた

終尔「どうした？嫌だつたか？」

マドカは首を横にふった

マドカ「嬉しい……ずっと……ひとりだつたから」

マドカは下を向き涙ながらに語つた

終尔「……」

ギュッ

終尔は何も言わずにマドカを抱きしめた

終尔「大丈夫……これからはずつと一緒だ」

マドカ「……うん」

5分後

マドカが泣き出したため終尔は泣き止むまで  
ずっと抱きしめ泣き止むと離れた

終尔「さて、マドカちよつと一緒に行こうか」

マドカ「うん」

終尔はマドカを連れて応接室に入った

シエラ「来ましたね」

終尔「お待たせしました」

シエラ「では、これを」

シエラはゼフィルスと同じ色のブレスレットを取り出した

マドカ「？」

終尔「マドカ、お前のＩＳだよ」

マドカ「いいの？」

終尔「ああ、これはマドカにしか使えないんだ」

マドカ「わかった」

マドカは受け取り手首に着けた

マドカ「似合つてるぞマドカ」

シエラ「いえいえ、では綺堂さん

データの方お願ひしますね？」

終尔「はい」

終尔とマドカは研究所を出たあと

日本に戻りＩＳ学園の前に家に立ち寄った

沙羅「おかえり終尔」

終尔「ただいま母さん

父さんは？」

沙羅「今日は会議があるから会社よ」

終尔「あの事は？」

沙羅「伝えてあるわ

で？その子が例の子？」

終尔「ああ、マドカ挨拶は？」

マドカ「は、初めてましてマドカです／＼＼

マドカは恥ずかしがりながら挨拶した

沙羅「初めまして終尔の母であなたの母になる

沙羅よ、よろしくねマドカ」

沙羅が微笑みながらマドカに返した

マドカ「よ、よろしくお願ひします／＼＼」

沙羅「ほら、いつまでも玄関に居ないで

早く入りなさい」

マドカ「は、はい！失礼します」

終尔「マドカ、ここはお前の家だ」

沙羅「そうよ」

マドカ「た、ただいま／＼＼」

沙羅「おかえり」

玄関から居間に移りこれからのお話をしていた

沙羅「で？これからどうするの？」

終尔「とりあえずマドカもIS学園に入学させた方がいいだろ」

沙羅「年齢的に大丈夫？」

終尔「特別編入つて形にすれば大丈夫だろ

その辺は学園長に交渉する」

沙羅「そう、ならしばらくは

マドカは家に居る形になるわね」

終尔「そうだな」

沙羅と終尔が話していると父が帰宅した

真尔「ただいま」

沙羅「あら？あなた、おかえりなさい」

終尔「おかえり父さん」

マドカ「おかえりなさい」

真尔「おつ？その子か

かわいい子じゃないか」

マドカ「は、初めてましてマドカです

よろしくお願ひします／＼＼」

真尔「話しへ聞いてるよ

父親になる真尔だ、よろしくなマドカ」

終尔「父さんちよつと頼みがあるんだけど

真尔 「ん?なんだ」

終尔 「入学手続きが済むまでの間

マドカに I-S の知識と訓練をある程度教えてほしいんだ」

沙羅 「なら私達と一緒に会社に行つて

会社の訓練場を使って訓練して知識は私が講師を

用意するわ」

真尔 「そうだな、そうしようか」

終尔 「ありがとう」

マドカ 「ありがとうございます」

終尔 「じゃあ俺は学園に戻るよ」

沙羅 「あら? せつかく帰つてきたんだから  
ゆつくりしてけばいいのに」

終尔 「そもそも言つてられないよ」

マドカ 「お兄ちゃん行つちやうの?」

終尔 「ごめんな? でもすぐにまた会えるから」

マドカ 「ほんと?」

終尔 「約束する」

終尔はマドカの頭を撫でながら言つた

マドカ 「わかつた」

沙羅 「ならまた連絡しなさい

それと連休には帰つてくるのよ?」

終尔 「わかつてるよ」

真尔 「またな終尔」

終尔 「じやあ行つてきます」

真尔 「気をつけてな」

沙羅 「行つてらつしやい」

終尔は家を出た

## クラス対抗戦！

I S 学園 アリーナ 控え室

この日、アリーナではクラス対抗戦があり生徒が集まっていた。

一夏と簪はクラス代表の為控え室で待機していたが

簪の顔は暗かつた。

簪「⋮」

一夏 「簪さん」

簪は一夏に呼ばれ一夏の方を見た

簪「あ、一夏」

一夏 「終尔のこと考えてたのか？」

簪「⋮うん」

一夏 「まだ連絡来てないの？」

簪「⋮うん」

一夏 「でも、終尔なら心配ないだろ」

簪「⋮心配じやないの」

一夏 「じやあ、何で簪さん暗いの？」

簪「あたしの専用機は終尔に手伝つてもらつて完成したの

だから、デビュー戦は

終尔に見てもらいたかったの」

一夏 「⋮そつか」

簪「⋮うん」

簪が頷くと簪の携帯がなつた

簪が画面を見ると

簪の表情が明るくなつた

一夏 「終尔から？」

一夏は微笑みながら聞いた

簪「うん！今日のお昼には帰ってくるつて！」

簪は嬉しそうに答えた

一夏「お昼か、なら簪さんが勝ち進んだら決勝には間に合いそうだな」

簪「うん！がんばる！」

一夏「おう！でも、俺も負けないぜ？」

簪「うん！お互に頑張ろう？」

一夏「おう！」

一夏たちが話終わると組み合わせが発表された

アリーナ

一夏「まさか、いきなり当たるとはな」

凰 鈴音「そうね、でも待つ手間が省けてちょうどよかつたわ

今、謝つたら痛めつけるレベルを下げてあげるわよ？」

一夏「どうせ、雀の涙程度だろ？」

鈴「あのね、絶対防御も完全じゃないのよ？絶対防御を越えるダメージを与えれば

本人に怪我させることも出来るの」

一夏「知ってるよ

やりたいならやれよ」

鈴「やりたい訳じやないけど…」

一夏「ならないさ

お互いに全力でやろうぜ」

一夏「はああああ！」

鈴「やあああああ！」

クラス対抗戦が始まつた

一夏「くそっ！」

鈴「なかなかやるじゃない

I Sに乗り出してすぐにしては」

一夏「そりやどうも」

鈴「これはどう？」

一夏「つ!?」

一夏は何が起きたか分からなかつた

鈴「どう？龍砲の味は？」

一夏「鈴の攻撃か：」

鈴「そう、あたしの専用機の  
特殊兵装『龍砲』よ」

一夏「ちつ！」

一夏は被弾しながらも  
なんとか避けていた

鈴「やるじやない

龍砲は初見だと回避が難しいのに

一夏「このままじゃ負ける！」

鈴「そろそろ終わりにしてあげる！」

鈴が勝負をつけようと

一夏に接近しようとした時

一筋の光がアリーナに

落ちてきた

鈴「何だつたのよ！さつきの」

一夏「わからない」

煙が晴れると一機のI Sが立っていた

鈴 「誰よ？あんた」

一夏 「誰だつ！」

I Sは応答しなかつた

一夏 「おいっ！」

アリーナ 管制室

千冬 「何だつ!?あのI Sは！」

真耶 「わかりません！」

それにさつきの攻撃で

アリーナの隔壁が下りていきます！』

千冬 「何だとつ！」

至急、織斑と凰に後退の指示を！

生徒には避難を！』

鈴『織斑先生、後退は無理です』

一夏『どうやら、ロツクオンされたらしい  
このまま後退しようとしたら  
客席にも被害が出る』

千冬 「ちつ！」

鈴『時間を稼ぎます

その間に生徒の避難をお願いします』

千冬「わかった！」

ただし！絶対に無茶はするな！』

鈴 一夏『了解です』

千冬「生徒の避難を急がせろ！  
それと教師部隊の出動もだ！」

真耶「はつ！はいっ！」

その時、千冬の携帯がなつた

千冬は携帯を確認すると

おもむろに電話をかけた

電話を切ると千冬は落ち着いていた

千冬「山田先生、生徒の避難を

優先してください」

真耶「何言つてるんですかっ!?」

織斑くんと凰さんを援護しないとつ!?

千冬「大丈夫ですよ。

教師部隊より先にアイツが来ますから  
奴はすぐに排除されるでしょう」

真耶「アイツ?」

千冬「ふつ」

千冬は不適に笑った

アリーナ

鈴「一夏、あんたは下がりなさい」

一夏「何言つてんだ?」

女残して逃げるなんて  
出来るわけねえだろ?」

鈴「て、いつてもあんたのが

弱いんだから仕方ないでしよう?」

おとなしく言うこと

一夏「あぶねえ!!」

一夏は鈴を抱き抱えた

鈴「きやつ!?」

鈴が居た場所をビームが通りすぎた

一夏「よそ見すんなって」

鈴「あつ、ありがと」

鈴「つて! いつまで抱いてんのよつ!」

一夏「暴れんなつて!  
すぐに下ろすから!」

ISはもう一度ビームを撃とうとすると

上空から、ミサイルが降り注いだ

一夏 鈴 「つ!」

簪『遊んでたら危ないよ？二人とも』

一夏「簪さん！」

簪「大丈夫？」

一夏「簪さん、なんで？」

簪「シャツターが降りる前に

アリーナに飛び出したの」

鈴「助かったわ、ありがと」

簪「さてと、じやつ

あれどうする？」

一夏「話しかけても

何も言わないしな」

鈴「攻撃してくる以上

倒すしかないでしょ？」

簪「そうだね

じゃ、私と凰さんで支援するから

隙を見て一夏は攻撃して？」

鈴「私が攻撃のほうが

いいんじゃない？」

簪「駄目」

鈴「なんですよ？」

簪「一夏は支援出来的

兵装積んでないから」

鈴「ああ、なるほどね」

一夏「うつ！」

鈴「なら、ちゃつちやと

片付けるわよっ！！

一夏「おうつ！」

簪「よろしく

凰さん！一夏！」

鈴「鈴でいいわよ！簪！」

簪「わかつた！鈴！」

一夏と鈴と簪はISに対峙した

・・・

一夏「くそつ！コイツ！」

鈴「強い！」

簪「3対1なのに

攻撃が読まる！」

戦況は劣勢だつた

3人の攻撃はISにかわされ  
3人はIS攻撃をかろうじて  
避けていたが少しずつ被弾していた  
簪（一夏と鈴のエネルギーがまざい！  
このままじゃ！）

簪が思考していると

ISに首を捕まれた

簪「あぐつ！うつ！？」

一夏「簪さん！」

鈴「簪！」

ISの腕から光が漏れだし  
ビーム発射の体制に入つた  
簪は抵抗したがISの力が強く  
腕から抜け出せず

ここまでかと目を閉じた時

ISの腕を一筋の光が貫き

腕は爆発し簪は即座に距離をとつた

一夏「今のはつ！」

？？『やれやれ、久しぶりに  
戻ってきたら楽しそうなこと  
してんじやないの？』

簪「あつ！ああ！」

簪は目尻に涙を浮かべていた

一夏 簪「終尔！」

鈴「誰？」

終尔「俺も混ぜてもらおうか？」

終尔はフリー・ダムを展開し

降下してきた

簪「終尔！ありがとう！」

終尔「間一髪だつたな

千冬さんにこのアリーナに  
突入しろって言われてな

来てみたら変なの居るし

簪ヤバそうだつたから

とりあえず撃つたけど

アレなんだ？」

一夏「わからない

話しかけても返事がないし」

簪「それに強い

こつちの動きを完全に読んでくる」

終尔「ふーん

アソツおんなんじ行動したりしてなかつたか？」

一夏「えつ？？」

うーん：あつ！何度があつた！」

終尔「やはりな

ハロ、あの機体をスキヤン  
してみてくれ」

簪「スキヤン？」

ハロ「スキヤン完了！スキヤン完了！」

終尔「やつぱりか」

簪「終尔、どうゆうこと？」

終尔「あの機体は人が乗つてない」

一夏 鈴 簪「えつ!!」

鈴「ありえないでしょ！」

I Sは人が乗つてないと動かないはずだし!!」

終尔「世界は常に変化している

自動制御のＩＳがあつても不思議はないさ」

一夏「でも、人が乗つてないなら

何で反撃したり攻撃してきたりするんだ？」

終尔「簡単だよ

ある程度のデータを入れて

ある程度の行動の対処方を

入れておけば、あとは勝手に動いてくれる

鈴「でも、アレどうやつて倒すの？」

あたしたちの攻撃は読まれてるし」

終尔「それも簡単だ、俺がやる  
お前らは下がつてろ」

簪「うん、お願ひ」

一夏「いや！待てよ！』

終尔！俺はまだやれる！」

鈴「そうよ！勝手に決めないでよ！」

終尔「ほう、そのつきかけの  
エネルギーでどう戦うんだ？」

一夏 鈴「うつー。」

終尔「強がつても空元氣

バレバレだバーカ

とつとと下がつてろ」

一夏「わ、わかつた」

終尔は簪に向き直り

微笑みながら簪の頬を撫でた

終尔「頑張つたな

ちよつと待つてろ？」

簪「うん」

終尔「さて、簪が世話になつたな  
たつぱりお返ししてやるよ」

その瞬間、フリーダムが輝いた  
やつと思いつと力が揃つたね

それなら大丈夫かな

フリーダムの色が灰色から

青や白のトリコロールカラーに変わった

終尔「いくぜ!!」

終尔はビームライフルを撃ちながら

接近していった

I Sは回避しながらビームを撃ち返す

終尔とI Sの激しい銃撃戦が繰り広げられた  
終尔（やはり、セオリー通りの攻撃では  
ダメージを与えられないか、ならば！）

終尔はさらに接近し

攻撃パターンを変えた

一夏「えつ!? ちよつ！ 終尔！」

終尔はI Sの周囲をギリギリの距離で  
旋回しながら、攻撃をしていた

I Sの反撃のタイミングに合わせ  
攻撃しI Sにダメージを与えていく

一夏「攻撃が当たってる」

鈴「何で？ あんなに攻撃してもほとんど  
当たらなかつたのに」

簪「普通の行動じやないからだよ」

鈴「えつ？ どうゆうこと？」

簪「あの機体は自動制御だから  
データにある行動には

対処出来るけど、データに  
無い行動なら回避されないので

終尔は最初の撃ち合いで

それを理解したから

普通の攻撃パターンから

普通ならありえない攻撃パターンに  
変えたの」

一夏「でも、それだと普通なら攻撃しにくいんじゃ」  
簪「確かに並の腕じやまともに攻撃なんて無理  
でも、それを補える技量があれば話は別」

一夏「俺たちはまだまだつてことか」

一夏は悔しさに拳を握りしめた

終尔「そろそろ終わりにするかな」

終尔が止めをさそうとした時

アリーナ内のスピーカーから声が響いた

簪『一夏あ！男なら！

男ならその程度の敵に勝てなくてなんとするつ!!』

一夏「簪つ!?」

鈴「嘘でしょっ!?何で放送席に！」

簪「まずいっ!!

I Sは簪の居る放送席に照準を定めた

一夏「簪つ!!」

簪「つ!?

終尔「やれ！オルコット」

セシリア『了解ですわ』

I Sの腕をスター・ライトのビームが貫いた

一夏「セシリアつ!?」

簪「良かつた：」

セシリア「終尔さんの指示で待機していく  
正解でしたわ」

終尔「片付ける」

I Sは両腕を失い射撃出来ない状態だつた

終尔「マルチロツク」

終尔はI Sにマルチロツクをかけた

終尔「終わりだつ!!」

終尔の攻撃によりI Sは完全に沈黙した

一夏「終わったな」

鈴「ふうつ！」

簪「はあ」

鈴は疲れを出すかのよう息を吐き  
簪は座りながらため息をついた

千冬『お前たちよくやつた

全員、一休みしてから会議室に集まれ  
20分以内に集合しろ

織斑、篠ノ之も連れてこい』

『了解です』

終尔「先に行くぞ？」

簪「たてるか？」

簪「うん：あつ！」

簪は立とうとしたが膝から

崩れそうになり終尔に支えられた

終尔「無理するな」

簪「うん：ごめんね」

終尔「やれやれ」ヒヨイ

簪「ひやつ！」

終尔「じつとしてろ」

終尔は簪は抱き抱えピットに戻つていった

鈴「あたしらも行きますか」

セシリア「ですわね」

一夏「俺は簪を連れてくる」  
各々もピットに戻つていった

20分後

IS学園 会議室

千冬「さて、まずは改めて全員よくやつた

あの機体は現在、調査中だ」

一夏「織斑先生、あの機体は？」

千冬 「詳しくは分からんが

おそらくどの国のＩＳでもないだろう」

鈴 「テロ組織独自の開発つてことですか？」

千冬 「おそらく

詳しいことは調べてみないと分からん

あの機体については他言禁止だ覚えておけ」

終尔 「あの機体についてなら知つてそうな人

知つてるぜ？」

千冬 「何つ!?」

一夏 鈴 セシリリア 「えつ!?!」

簪 「誰なの?」

終尔 「電話してみる」

終尔は電話をかけた

プルルルルルガチャ『もすもすひねもすく?  
ハクイ皆のアイドル束さんだよく』

終尔 「もしもし? 束さん?」

一夏 鈴 セシリリア 簪 「ええつ!?! 篠ノ之博士つ!?!」

簪 「姉さんつ!？」

千冬 「束だとつ!？」

終尔 「束さん、用件はだいたい分かるよね?」

束『もーちのろくん! 学園に来たやつでしょ?』

終尔 「そうそう、アレ束さんのでしょ?」

束『元ね』

終尔 「元?」

束『そうちそ、作つたけど

廃棄した隠れ家に置いてきたやつでね

亡国企業から逃げるの優先して

コア抜いてなかつたんだよね』

多分そのまま亡国企業が利用したんだろうね』

終尔 「なるほどね』

束『ごめんね』自衛の為に作つたんだけど

完成の手前で襲撃されちゃつてさ

回収出来なかつたんだ！」

終尔「いえいえ、そんなに強くなかつたし」

束『まあ、しゅうくんなら問題ないか』

終尔「あの機体のコアは貰つてもいいですか？」

束『いいけど、何するの？』

終尔「ちょっとね」

束『ふうーん、まあいいや

今度行くからそん時にでも教えてね、  
そいじゃーまつたね♪』 プツ

終尔「だそうです」

千冬「なるほど、まあだいたいの謎は解けたな  
だが、新たな問題も発覚した」

終尔「亡国企業！」 ギリツ

終尔は歯を食いしばつた

一夏「あの亡国企業つて：」

終尔「I Sを使い世界各地でテロを行つている  
テロ組織だ」

鈴「名前は聞いたことがあるわ

うちの試験機も襲撃されたことある」

セシリリア「私も聞いたことがありますわ」

千冬「束を狙つたのは戦力拡大の為か」

終尔「そう考えるのが妥当ですね」

簪「コアを作れるのは篠ノ之博士だけですしね」

千冬「今回の襲撃は：」

終尔「おそらくは偵察」

簪「学園の戦力を調べるのが目的」

鈴「でも、何のために？」

セシリリア「ここを襲う意味はないような気がしますが？」

千冬「狙いはI Sのコアだろう」

セシリ亞「コア？」

千冬「そうだ、ここには専用機と訓練機を合わせると30近いコアがある」

終尔「機体は作れても、コアがなければ意味はない」

簪「そして、ここなら

他の国の軍を襲うより、成功率は高い」

鈴「成功すれば、専用機と

大量のコアを確保できる」

簪「狙うなら格好の獲物か」

セシリ亞「狙うならここと言うわけですわね」

千冬「重ねて言っておくが、この事も他言禁止だ」

終尔「了解です」

一夏「わかりました」

千冬「さて、最後だな」

終尔「篠ノ之の件ですね」

簪「なつ!?

一夏「えつ!?

千冬「そうだ」

簪「わっ！私が何をつ!？」

終尔「あの声援は何だったんだ？篠ノ之」

簪「いつ！一夏に渴を入れようと・」

終尔「バカ野郎つ!!」

終尔は怒鳴った

終尔「そんな事をしても意味あるかつ!!

お前の向こう見ずな行動のせいだ

何人もの人の命を危険にさらしたんだぞつ!!

簪「うつ！」

終尔「オルコットに狙撃の準備をさせてなかつたら

お前どころか何人もの死者が出ていたかも

知れないんだぞ！」

一夏「まつ！待てよつ!!終尔つ！」

確かに簪の行動は危険だつたかも  
知れないけど、皆無事だつたんだし……」

終尔「つ!!」バキッ

終尔は一夏を殴り飛ばした

一夏「なつ!?

何すんだよつ!? : つ!?

終尔は一夏の胸ぐらを掴んだ

終尔「お前は何もわかつてないな!

今回の戦闘は訓練でも実習でも演習でもない  
実戦なんだぞ! 死ねばそれで終わりだ!

何か起こつてからじやおせえんだよ!」

一夏「つ!?

千冬「綺堂、離してやれ

あとは私が話す」

簪「終尔」

終尔「ちつ! 先に部屋に戻ります」パツ

簪「あつ! 終尔!」

終尔は部屋を出ていった

千冬「更識、お前も行つていいぞ」

簪「あつ! はい!」

終尔の後を追つて簪も部屋を出た

千冬「さて、一夏

お前は今回の戦闘をどうとつていた?」

一夏「それは……」

千冬「簪、お前はどうだ?」

簪「……」

千冬「鈴、オルコット、お前たちは?」

鈴「死んだらやり直しはきかない実戦  
油断は禁物：そんなところです」

セシリア「わたくしもですわ

だからこそ、終尔さんの指示を聞き

いつでも狙撃できるようにスタンバイしていました」

千冬「ふむ、わかつたか？」一夏、筠  
お前たちは実戦を理解していなかつたんだ  
さつき、一夏：お前は筠を庇おうとしていたが  
筠がしたのは自分の命と他の人たちの命を  
危険にさらす行為だ

それは実戦では絶対にあつてはならんことだ」

一夏「…」

筠「…っ！」ギリツ

千冬「一夏、優しさは大事だがそれだけでは  
大事なものは守れない  
それだけは覚えておけ」

一夏「…わかつた」

千冬「筠、お前は向こう見ずな時がある  
自分の行動がどうゆう結果をもたらすか  
少し考えるようになろ」

筠「…はい」

千冬「よし、では今日はもう全員休め解散だ」  
各々が部屋から出ていった

# 一夏の特訓開始！

I S 学園 アリーナ

クラス対抗戦から数日経ち

一夏たちはアリーナにて訓練に励んでいた  
今日は終尔も参加しております

現在は客席にて椅子に寝ころがり

一夏、セシリリア、鈴、簪による

訓練の様子を傍観していた

簪「こんな訓練じや強くなれるわけないよね…」

終尔「まつたくだ：あの時も一夏の弱さは  
不思議に思つたが：そろそろ行くか」

簪「そうだね」

終尔は体を起こし簪も椅子から立ち上がり  
客席から終尔はエクシアを開けし

簪も打鉄二式を展開しアリーナに飛び下りた

一夏「あつ、終尔」

セシリリアたちは口喧嘩の最中で

終尔たちにまつたく気づいてなかつた

終尔「一夏、一応聞くが

いつもこんな感じで訓練してたのか？」

一夏「まあ：だいたい…」

鈴が来る前はセシリリアと簪

だけだつたけど…」

終尔「そうか…」

終尔はセシリリアたちに向き直つた

セシリシアたちはまだ口喧嘩を続けていた

終尔は息を大きく吸いだし簪は耳を防いだ

終尔「ううるつせつえー!!」

一夏は間に合わずもろに爆音を聞いた

セシリ亞たちはいきなりの怒声に驚き腰を抜かせていた

終尔「お前らは何しに来てんだつ!?一夏の特訓に来てんだろうがつ！」

さつきから口喧嘩ばかりしやがつて！特訓つけるき無いなら、さつさと帰れ！」

セシリ亞 鈴 篠「つ！…」

終尔「もうひとつ…

お前らは講師失格

次からはお前らは一夏の特訓の口出し禁止な？」

セシリ亞「えつ！？」

篠「なつ！？」

鈴「ちよつとつ!? 何であんたが勝手に決めるのよつ!!」

篠「言われないと分からぬい？」

鈴「えつ？」

終尔「ここ2、3日お前らの特訓の様子はずつと見てたが…

お前に講師は出来ん！

篠ノ之、お前からいこうか…

どこの体育教師がバスケやサッカーのやり方を擬音ばかりで教えるやつがいる？」

篠「うつ！…」

終尔「お前の一夏にたいする

説明は擬音ばかりでさっぱりわからん！そんな説明するやつは講師失格だ！」

篠「ううつ！…」

篠は落ち込み暗くなつた

終尔「次は凰、お前だ

お前の説明は篠ノ之と変わらん！

感覚で説明されて分かるか！

そんなもん、お前の感覚であつて  
一夏が同じ感覚な分けねえだろ！」

鈴「うぐつ！」

鈴も落ち込み暗くなつた

終尔「最後はオルコット、お前だ  
お前は篠ノ之と凰よりはましだが  
それでも実技講師としては失格だ！」  
セシリア「そんなつ!?私のどこがつ!?」

終尔「専門用語ばかり並べたり

細かい数字を並べるな！

技術者とかならそれで分かるが  
一夏はド素人だぞ！

そんな説明で分かるか！」

セシリア「うつううつ！」

セシリアも落ち込み全員落ち込んだ

終尔「試しに手本を見せてやる」

終尔は一夏に向き直つた

終尔「とりあえず基本動作のチエツクするぞ？」

一夏「あつああ、よろしく頼む」

セシリアたちは終尔たちを見ていた

終尔は地面に渦状の線を引いた

終尔「一夏、この上浮遊しながら

なぞつてみろ」

一夏「おつ…おう」

一夏はなぞつてみたが、やはり  
うまく飛べずかなりそれながら  
なぞつていた

終尔「簪、手本を見せてやれ」

簪「うん」

簪は綺麗に線の上をなぞつていった

一夏 「おつ！おおう…

ここまで差が…」

簪 「一夏、下手すぎだもん」

一夏 「うぐつ！」

簪 「教えてあげる」

一夏 「…お願いします」

簪は一夏に近づいた

簪 「一夏はブースターの制御だけで回ろうとするから、それちやうんだよ？」

ブースターの出力は維持して

重心を制御して回れば

そんなにそれないよ？」

一夏 「重心を制御…」

簪 「体を傾けながらって言つた方がわかるかな？」

一夏 「こうか？」

一夏はもう一度なぞつてみると

1度目よりも綺麗に回っていた

一夏 「おつ！出来た！」

終尔 「わかつたか？お前ら」

セシリリア 鈴 簪 「ぐつ！ぐぐぐつ！」

鈴 「でつ！でも、今教えたのは簪じやない！」

終尔 「ほう？俺が教えるのが下手とでも？」

なら、一夏：少し手合わせやるか

一夏 「おつ！おう！」

終尔 「いいか？空中戦闘は

自由な戦い方が出来る

それを少し教えてやる

一夏 「自由つて？」

終尔 「少し飛ぶぞ」

終尔は地面から5メートル付近まで上昇し

一夏も後に続いた

終尔「一夏、斬りかかつてこい」

一夏「よし、行くぞ?」

一夏は終尔に向かつて行き

終尔と剣の切りあいを始めた

終尔「そこまで」

一夏「おつ！つと！…ふうつ

終尔「一夏、お前まだ空中戦闘に慣れてないな  
腕だけで刀を振つてるふしがある」

一夏「そうかな?

自分じや上手く分からぬけど

終尔「もう少し体を上手く使え」

一夏「つて言われてもな〜?」

終尔「少し見せてやろう」

終尔はGNブレイドを構え

体を回転させながらGNブレイドを振り抜いた

一夏「おおつ！」

終尔「空中では周りを気にせず剣を振れる  
地面や壁を気にする地上と違つてな?

だからこそ地上では出来ない戦闘が出来る

空中戦闘はIS戦闘の基本とも言つていい」

一夏「なるほどな」

終尔「これからは俺と簪が基本の訓練をつける  
簪には基本動作を俺が戦闘指導をな」

一夏「わかつた。よろしく頼む」

終尔「とりあえず今日は飛行の訓練  
をしたら終わるぞ?」

一夏「飛行の訓練?」

簪「終尔、アレ…やるの?」

簪は顔を青くしながら終尔に聞いた

終尔「もちろん!アレが一番手つ取り早い!」

一夏 「アレって？」

終尔 「簡単だよ一夏

たんなる鬼ごっこだから」

一夏 「お…鬼ごっこ？」

簪 「一夏、ギブアップは早めにね？」

一夏 「えつ!?」

終尔 「ルール説明するぞ！」

鬼はすつと俺！お前は飛行しながら逃げればいい

一夏 「それなら何とか？」

終尔 「10数えたら開始な？」

一夏 「おう！」

一夏は空に飛び立つた

終尔 「なら、一夏行くぞ！」

一夏 「おう！」

鬼ごっこが始まり終尔の追跡が始まつた  
だが、一夏はトップスピードの飛行になれておらず、すぐに追いつかれた

終尔 「じゃあ、1回目！」

終尔は全力で一夏を蹴り飛ばした

一夏は驚きそのまま壁に激突した

一夏 「いってて…終尔！何すんだよつ！？」

終尔 「俺は鬼だぞ？」

タツチなんて生易しいものなわけねえだろ？」

一夏は簪に言われたことを思い出した

簪『ギブアップは早めにね？』

一夏はこういうことかと理解した

終尔 「じゃあ2回目行くぞ！10秒な」

一夏 「ちよつ！まつ！終尔！」

終尔 「ちなみに10回越えないよ

ギブアップは受け付けんぞ？訓練にならん」

一夏はあと9回もあるのかと絶望した

終尔「GO!!」

一夏「ぎいやあああああ！」

その頃外野は

簪「一夏、死なないかな？」

セシリア「簪さんもアレを…？」

簪「うん、まあ殴られたり蹴られたりはなかつたけど、私のときは放り投げられた」

鈴「アレって訓練ていうか拷問じやないの？」

簪「でも、回避技能と飛行技能はつくよ？」

簪「だが、その前に死にそうなきが…」

簪「ISあるから大丈夫だよ

それに短期間で強くなるなら

これぐらいしないとね」

30分後

一夏は死に体になりながら戻ってきた

終尔「まあ今日はこんなもんか」

一夏「……」

一夏は返事をする気力もなかつた

セシリア「い、一夏さん生きてます？」

鈴「あんな訓練受けたら誰だってこうなるわ」

簪「私も初日はこうなつたし」

終尔「一夏、半分は自分の責任だつてこと覚えとけよ？あんな訓練しかしてなかつたから、ここまでしないとお前は強くなれん」

一夏「だからって…ここまでしなくても」

一夏は少し回復して終尔に反論した

終尔「アホか、お前が対抗戦で

ろくに成長してないのが分かつたから

ここまで強行手段にてんだろうが

強くならなきや、お前

そのうち自分の身も守れんぞ？」

一夏「えつ？…それって」

終尔「お前、オルコットたちから聞いてないのか」

終尔はセシリ亞たちを睨んだ  
セシリ亞と簪は目をそらした

一夏「終尔、どうゆうことだよ」

終尔「はあ～～」

終尔は大きなため息をついた

終尔「やれやれ、まさかそのレベルとはな  
いいか？よく覚えとけよ？」

俺たちはこの世界に二人しかいない

男性 I S 操縦者だ

俺たちは異例中の異例であり

世界中の科学者は俺たちの体を調べたがってるし

女尊男卑を掲げる連中は

俺たちを目の敵にしてる

そんな奴等が強行手段に出てみろ？

買い物とかで学園から出たとたんに  
そいつらに襲撃される可能性は

0じゃないんだぞ？

そんな時の為にも俺たちは I S を持たされ  
学園の寮に急遽入寮してるんだ

だからこそ、お前は自分の身ぐらい

守れるぐらいにならないといけないんだ」

一夏「でも、そんなこと本当に」

簪「甘いよ、一夏」

一夏が信じられないと言おうとすると

簪が止めた

簪「街中で襲撃されないと本気でまだ思ってるの？  
この間の無人機の件、もう忘れた？」

終尔から聞いてないだろうけど

この間、終尔が学園から離れたのも

亡国企業から試験機を守るために  
派遣されたんだよ？

今まで何機のISがテロ組織に奪われたと思う？  
一般的企業だけじゃなく軍からも強奪したり  
してるんだよ？それに比べたら  
たつた二人の人間の拉致

または殺人なんてどれほど軽いと思ってるの？  
大金積めば動くテロ組織なんていっぱい  
あるんだよ？」

簪が事実を述べると一夏は驚愕していた

終尔「一夏、お前は世の中を知らなすぎた  
もつと世界を知れ、情報も1つの力になるからな」

一夏「俺：何にも知らなかつたんだな」

一夏は少し暗い顔をしていた

終尔「まあ、この間まではお前は

一般の人間だつたからな

ISがらみの仕事にでも就かんかぎり  
テロ組織とかと交わることないしな

知らなかつたのは無理もない

だが、もうお前は一般の人間じやない  
だからこそ情報を知り、力をつけろ」

一夏「わかつた…」

終尔「とりあえず、明日からも訓練はするから  
死ぬ気でついてこい

この間みたいに都合よく

誰かが助けてくれるわけじゃないからな」

一夏「おう！明日からもよろしく！」

終尔「もののついでだ、オルコット

お前も来い」

セシリア「えつ？いいんですの？」

終尔「与えられた機体ぐらい乗りこなせ

ついでにお前も鍛えてやる」

セシリア「ありがとうございます！」

簪「篠ノ之さんも来れたら来たら？」

まだ空中戦闘とか出来ないんでしょ？」

筈「うつ！うむ…よろしく頼む」

簪「鈴は？」

鈴「あたしは来れたら顔出すわ

ある程度は機体使えるし

あとは自分の腕を磨くだけだからね」

簪「そつか、わかつた」

終尔「んじや今日は解散するか」

全員アリーナをあとにし

各々の部屋に戻つていった

次の日から終尔と簪の指導のもと  
一夏たちの特訓が始まった

## 更なる転入生！

一夏たちの特訓が始まり  
セシリア、一夏、簪は  
簪と終尔の特訓を受けていた  
セシリア「これは？」

終尔「ピンポン玉

卓球で使うやつだな」

セシリア「これをどうするんですの？」

終尔はセシリアにピンポン玉を

2つ渡していた

終尔「並行思考の基本は

同時に別のことをすることで慣れる」

セシリア「同時に？」

終尔「これ出来るか？」

終尔は手の中のピンポン玉2つを  
手の中で回していた

セシリアもそれを真似る

セシリア「これなら…」

終尔「じゃあこれは？」

終尔はそれを両手でやりだした

セシリアは上手く出来ず

片手は回せたがもう片方が上手く回せない

セシリア「少し難しいですわね」

終尔「今日はそれが出来るまでやつてろ  
そしたら並行思考の基礎が出来る」

セシリア「わかりましたわ」

終尔はセシリアの特訓をしていた  
一方

簪「ほらっ!! 一夏!! 線からずれてる！」

同じミスをさつきから連発だよ!!

鈴も!!体勢が崩れてる!!

崩しちゃ駄目って言つてるでしょ!!

一夏「はつ！はいつ!!」

鈴「くうつ！」

一夏と鈴は簪のスバルタ教育を受けていた

その後

終尔「そろそろ帰るか？」

簪「オッケー」

一夏！鈴！今日は終わり!!

セシリア「指がつりそうでしたわ…」

一夏「頭がぐるぐるしてる…」

鈴「さすがに少しきついな…」

セシリアは上手く回せず終尔の監督のもと

ひたすらピンポン玉を回していた

一夏と鈴は飛行時の姿勢制御と

飛行動作の特訓を受けていた

鈴「おつかれー」

鈴が全員にドリンクを配つていく

簪「鈴、おつかれ、ありがとうございます」

終尔「おつーサンキューー」

一夏「サンキューー」

鈴「すまん」

セシリア「ありがとうございます」

鈴「いやー見てたけど、簪は

性格変わりすぎでしょ

見てて『あれ、簪?』つておもつちやつたわよ

簪「うつううつ…」

簪は恥ずかしくなり赤くなつてうつむいた

鈴「でも、一夏と鈴は大分飛べるようになつたんじやない?」

簪の指導のおかげで一夏と簪は最初に比べるとかなり上達していた

一夏「結構ハードだからな：」

簪「うつうむ：はじめは性格を知っていたからなめていたが、ここまでキツいとは…」

鈴「でも、感謝しなさい

簪のおかげであんたらかなり上達してんだから

終尔「おしゃべりはここまでだ

そろそろ閉館だ、外に出ないとどうやされる

オルコット、さつきのは部屋に戻つても

時間を見つけてやれ、出来るようになつたら

次に進む

セシリア「はっ！はい！」

終尔「じゃあ戻るか」

終尔たちはアリーナを後にした

終尔と簪は部屋に戻りシャワーを浴びたあと夕食をとり

部屋でくつろいでいると

ドアをノックする者がいた

終尔は不機嫌になりつつも

簪になだめられドアを開けた

真耶「お引つ越しです！」バタン

終尔はドアを閉めた

真耶「ちよつ！ちよつと！綺堂くん！」ドンドンドン

簪「終尔、話だけでも聞いてあげようよ？」

簪は苦笑いしながら告げた

終尔「ちつ」ガチャ

終尔は悪態をつきながらドアを開けた

真耶「ああ！よかつた！」

あの綺堂くんの部屋の都合が着いたので

お引っ越しを…」

終尔「嫌です」

終尔は真耶が言い終わる前に断つた

真耶「嫌と言われましても…」

年頃の男女を同じ部屋に長くいきせるのは」

真耶は涙目になりながら告げる

終尔「俺は今の状況に満足してますし

簪も同じです。本人たちが満足しているなら

問題ないのでは？」

真耶「しつ！しかし、やはり年頃の男女

ですから、こちらとしても今の

状況をそのままというのは…」

コンコンコン

真耶が言い終わる前にまたノックがなった  
終尔が開けると千冬と樋無が立っていた

終尔「おやつ珍しい」

樋無「ご挨拶ねえ」

千冬「こいつなら普通だろう

入つていいか？」

終尔「この問題を解決してもらえるなら」

千冬「問題？」

千冬と樋無は首を傾げながら部屋に入った

千冬「真耶か、どうした？」

真耶「あっ！先輩、実は部屋割りを  
決めたので綺堂くんにお引っ越しをお願いしていたんですけど

断られてまして…」

千冬「ああ…そういうことか  
なら、綺堂はこのままでいい

更識もこのままがいいんだろう？」

簪「出来れば、このままがいいです」

簪は頬を赤く染めながら答える

楯無は微笑ましく見ていた

千冬「わかつた：政府には

私から報告しておくから

真耶はもう戻つていいぞ」

真耶「は…はい…わかりました」

真耶は部屋を出ていった

終尔「ありがとうございます」

千冬「なに、生徒の不満を解消するのも

教師の勤めだ」

楯無「なら、そろそろ本題に入りましょうか？」

終尔「本題とは？」

千冬「明日また転入生が3人来る」

終尔「軍隊の補充要員みたいな来かたですね」

千冬「そう言うな」

楯無「で、その転入生なんだけど

1人目は前に終尔君から聞いてた

終尔君の妹さん？ その子が明日から来るわ」

終尔「ああ、明日からなんですね」

千冬「ああ元々2人の予定だったが

一緒に日のほうが都合がいいからな」

楯無「で、2人目はドイツの軍人さん

名前はラウラ・ボーデヴィイッヒ」

終尔「ああラウラか」

楯無「知り合い？」

終尔「千冬さんの教え子だ」

千冬「まあ間違つてはないな」

楯無「なるほどね」

なら、3人目ね

名前はシャルル・デュノア

フランスのデュノア社所属の

代表候補生で男性みたいよ?」

終尔「ほう」

簪「男性? 最近のニュースでは  
そんな事言つてなかつたよね?」

楯無「そつ!だから、終尔君に  
私と千冬さんでお話に来たの」

終尔「ていつも、どうせ調べは  
ついてるんでしよう?」

楯無「もちろん! それも私の仕事だもの  
本名はシャルロット・デュノア:女性  
デュノア社の社長の娘でどうやら  
訳ありみたいでね

詳しいことはまだ調査中よ

目的はまだ不明だけど

男性と偽らせてこの学園に潜入させようと  
しているみたいね」

千冬「そこで、お前にはデュノアの  
監視を頼みたい」

終尔「監視ねえ」

簪「でも、よく学園側は転入を許可  
しましたね」

千冬「デュノア社とは契約があるからな  
その契約を上手く利用されたんだろう」  
楯無「まあ、とにかく不穏分子を  
そのままにしておけないから

終尔君に監視をお願いしたのよ」

終尔「了解。で?報酬は?」

千冬「既に払つただろう?」

終尔「え?」

千冬「更識と別の部屋になりたいか?」

終尔「うつ!了解…」

楯無「じゃあ、よろしくね」

千冬「ではな、二人とも明日遅刻するなよ」

楯無「おやすみ！」

千冬と楯無は部屋を出ていった

終尔「まあなんとかなるか」

簪「大丈夫なの？」

終尔「まあ、大丈夫だろ

それより疲れたし、もう寝よう？」

簪「うん！おやすみ！」

終尔たちは就寝についた

## 翌日 教室

教室では千冬が教壇に立ち挨拶をしていた

千冬「諸君、おはよう。今日から

本格的な I.S の実戦演習に入る

よつて、I.S スーツを忘れないように

忘れたものは学校指定の水着

それも無いものは…まあ、下着でも構わんだろう

生徒一同「……」

生徒たちはこの人何言つてるの？？と思つた

千冬「さて、山田くん後は頼む」

真耶「はい。では、皆さんに

また転入生を紹介します！」ガララ

教室に3人の生徒が入ってきた

真耶「では、1人ずつ自己紹介をお願いします」

生徒「はい」

シャルロット・デュノア「では、僕から

シャルル・デュノアです

フランスからきました

どうぞよろしくお願ひします」

生徒「…き」

シャルロット「きう？」

生徒「きやああああ!!」

生徒「男子よつ!!」

生徒「3人目!!」

生徒「しかも、結構カツコいい!!」

千冬「やかましいっ！静かにせんかつ!!」

千冬が一喝すると全員が黙る

？「では、次は私が

綺堂マドカです。名字でお気づきと思いますが  
綺堂終尔とは兄妹の間柄です  
事故で両親を無くし、綺堂家に引き取られました  
織斑先生と顔が似ていますが  
他人の空似ですので

あまり気にしないで下さい

これからよろしくお願ひします」

生徒「ええええええ!?」

生徒「綺堂くんの妹!？」

生徒「他人の空似って似すぎでしょ！」

終尔「うるせえっ！」

気にしないでくれって言つてんだろ！  
あんまりうるせえと殺すぞ！」

千冬「綺堂、抑えろ

お前たちもあまり綺堂妹に迷惑をかけるなよ？」

？「では、最後は私か

ラウラ・ボーデヴィイツヒだ

ドイツ軍の黒兎隊の隊長を勤めている

以後、よろしく頼む」

真耶「では、それぞれ席について下さい」

3人は席に向かい途中ラウラとマドカは

違う場所に向かつた

マドカ「久しぶり、お兄ちゃん」

終尔「おうつ久しぶりだな

今は時間無いからまた後でな」

マドカ「うん！」

ラウラ「貴様が織斑一夏だな？」

一夏「えつ？あつああそうだけど…」

ラウラ「ドイツで織斑教官には世話になつた

今度は私が恩を返す番だ

専用機を持つてるそうだな？

訓練の時は声を掛けろ

手を貸してやる」

一夏「あつああ助かる。ありがとう」

ラウラ「気にするな、恩を返すだけだ」

ラウラは一夏の次に終尔の所に向かつた

ラウラ「お久しぶりです！マスター！」

終尔「マスターは止めろつて

終尔でいい」

ラウラ「はっ！」

またしても波乱の1日が幕を開けた